

【子ども版】

日田市の歴史と文化財



文化財ってなんだろう？

文化財とは、私たちの国の長い歴史の中で生まれた文化（私たちが日頃使う道具や住んでいる建物、皆さんが聞く音楽、鑑賞する芸術など生活のすべて）が育まれ、今日の世代に守り伝えられてきた貴重なみんなの宝物を指します。

これは、私たちの国や地域の歴史や文化などを知るうえで欠かすことの出来ないものであるのと同時に、将来の私たちの地域を元気にするための力の源になるものです。

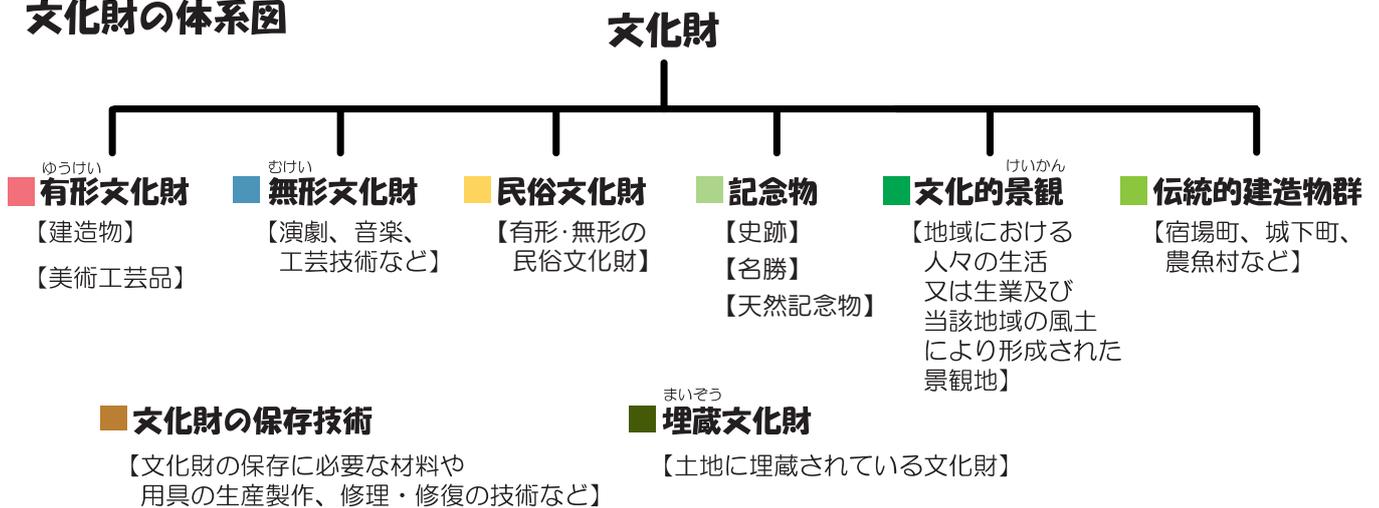
文化財にはどんな種類があるの？

文化財は、大きく「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」及び「伝統的建造物群」に分かれています。これらのうち、特に大事だとされるものを指定、選定、登録の文化財として重点的に保護しています。

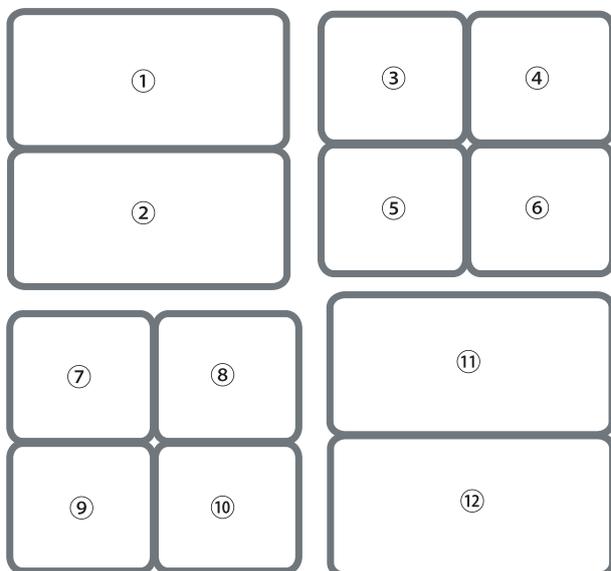
そのほかに、土地に埋蔵されている文化財を「埋蔵文化財」、文化財の保存・修理に必要な伝統的技術・技能を「文化財の保存技術」と呼び、保護の対象としています。

こうした区分けのもと、国の歴史や文化にとって大事だとされるもの、大分県の歴史や文化にとっても大事だとされるもの、私たちの日田市にとって大事だとされるものをそれぞれで指定・選定・登録して、これらの保護を進めています。

文化財の体系図



表紙写真解説



- 1 日田市豆田町伝統的建造物群保存地区
国選定重要伝統的建造物群保存地区
- 2 小鹿田焼の里・小鹿田焼
国選定重要文化的景観・国指定重要無形民俗文化財
- 3 木造十一面観音像
国指定重要文化財
- 4 小野川阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木群
国指定天然記念物
- 5 大原八幡宮の米占い行事
国選択無形の民俗文化財
- 6 ガランドヤ古墳
国指定史跡
- 7 老松天満社
国登録有形文化財
- 8 石坂石畳道
県指定史跡
- 9 日田祇園の曳山行事
国指定重要無形民俗文化財
- 10 柳ノ本遺跡
埋蔵文化財
- 11 耶馬溪（一部）
国指定名勝
- 12 大野老松天満社
国指定重要文化財

【子ども版】

日田市の歴史と文化財



発刊にあたって

皆さんが日々学び、生活をしているこの日田市は、豊かな水流に恵まれていることから『水郷すいきょう日田』と呼ばれ親しまれています。

また、北部九州の中心に位置していることから、古代より交通の重要な拠点として栄えてきました。なかでも、江戸時代は、幕府の直轄地（天領）として九州の政治・経済の中心となり、独特の伝統や文化を育みました。市内にはこうした多くの歴史や文化が現在に残っています。

日田に残る文化財は多種多様で、国・県・市によって指定されている文化財だけでも186件（令和6年3月31日現在）を数えます。本書はこれらの文化財を紹介するものです。

皆さんにはぜひ、本書を読んで自分たちの身近にある文化財や、日田市の歴史を学んでもらいたいと思います。そして、友達や家族と地域の歴史や文化財について話し合ってみてください。きっと自分たちの町が今までとは違った見え方をするのではないのでしょうか。

私たちは今後も、貴重な文化財を守り伝えることで、皆さんが自分たちの住む町を、より好きになってくれるように努めていきたいと思います。

最後に、発刊にあたってご指導、ご協力をいただきました監修の後藤宗俊先生、豊田寛三先生をはじめ編集者、文化財所有者、関係者の皆様方に対して深く感謝を申し上げます。

なお、本書は平成26年に刊行した『子ども版 日田市の歴史と文化財』の第3版であり、前回刊行後に生じた文化財の新指定や解除について、改訂を行っています。

令和6年3月

日田市教育長 江嶋 久典



監修のことば

日田市の小学生の皆さんに、『子ども版 日田市の歴史と文化財』をお届けします。本書は、皆さんに、ふるさと日田市の歴史や文化財に興味をもち、疑問を解決していただくために作成したものです。

1805（文化2）年24歳の廣瀬淡窓は、豆田町長福寺の学寮に2人の弟子とともに自炊生活をしながら塾を開きました。これが、日本近世最大の私塾である咸宜園のスタートです。80余年の間に、咸宜園で学ぼうと思い、全国各地から5,000人以上の若者が、はるばる日田の地に集いました。

咸宜園での学修生活は、大変きびしいものでした。多くの塾生は、狭い寮で共同生活をしながら学び、毎日の学習の成果を知るために、毎月テストがあり、その結果は塾内に公表されました。

では、なぜ、若者は咸宜園に来たのでしょうか？ひとつは、淡窓先生の教育への姿勢である「師弟同学」だと思います。先生も弟子も共に学ぶ者であるという考え方と先生の温厚な人柄が、若者の心をとらえたのです。そして、咸宜園に学ぶことによって、確実に実力がつき、それぞれ自分の将来が切り開けると思ったからでしょう。だからこそ、自分のふるさとを離れ、九州・日田の地にやってきたのです。卒業後（「大帰」といいます）は、それぞれの人が地域で重要な人物として、さまざまな分野で活躍しています。

皆さんは、このような伝統をもつ日田市に生まれ、育ったのです。そのことを誇りに思ってください。

本書では、自然・歴史・文化財（原始、古代、中世、近世、近現代）の日田についてわかりやすく書かれています。皆さんの先祖や多くの先人たちが、困難を乗り越え、すばらしい歴史と文化財を残し、現在の日田をつくったのです。

記述のなかには、はじめて知ったこともあるでしょう。新たな疑問もできるでしょう。友だちや先生といっしょに調べ、いっしょに考え、話し合ってください。この本によって、日田を知り、日田を好きになってください。そして伝統を受けつぎ、自分たちで日田をもっとよくするために行動してください。執筆者一同からのお願いです。

平成31年3月

大分大学名誉教授 豊田 寛三



子ども版日田市の歴史と文化財もくじ

日田の歴史

● 日田の自然と風土

阿蘇山大噴火と日田 ————— 6

津江の自然 ————— 8

● 古代のひた

先史時代の暮らし ————— 10

吹上のムラと環濠集落 ————— 12

コラム 金銀錯嵌珠龍文鉄鏡 ——— 14

古墳時代のはじまり ————— 16

前方後円墳の時代 ————— 18

装飾壁画の世界 ————— 20

古代の役所と石井駅 ————— 22

● 中世のひた

武士の登場と大蔵氏 ————— 24

コラム 大蔵氏の館 ————— 26

大蔵永季と相撲節会 ————— 28

津江山と大宰府天満宮 ————— 30

蒙古襲来と日田 ————— 32

日田の平安・鎌倉・室町時代 ——— 34

室町時代の日田 ————— 36

豊臣秀吉時代の日隈城 ————— 38

● 近世のひた

代官支配から幕府領地へ ————— 40

日田代官と日田御役所 ————— 42

コラム 豆田・隈の町並み ——— 44

江戸時代の交通 ————— 46

日田商人の活躍 ————— 48

農民の暮らし ————— 50

豆田の町人文化 ————— 52

日田祇園と鶴飼 ————— 54

廣瀬淡窓と私塾咸宜園 ——— 56

日田林業の芽生え ————— 58

● 近・現代のひた

日田の明治維新 ————— 60

コラム 筑後軌道 ————— 62

戦時下の日田 ————— 64

日田の大水害 ————— 66

将来の日田市 ————— 68

小学校区の文化財もくじ

 小学校区の文化財 — 70

 咸宜校区の文化財 72

 桂林校区の文化財 74

 日隈校区の文化財 76

 若宮校区の文化財 78

 三芳校区の文化財 80

 高瀬校区の文化財 82

 光岡校区の文化財 84

 朝日校区の文化財 86

 三和校区の文化財 88

 有田校区の文化財 90

 小野校区の文化財 92

 大明校区の文化財 94

 石井校区の文化財 96

 前津江校区の文化財 98

 津江校区の文化財 100

 大山校区の文化財 102

 東湊校区の文化財 104

 いつま校区の文化財 106

文化財にふれてみよう！
見てみよう！

施設紹介 ————— 108

文化財一覧 ————— 110

日本遺産とは ————— 112

編集・執筆・協力者一覧 — 116

阿蘇山大噴火と日田

阿蘇山あそは今も続く活火山ですが、その活動は27万年も前から始まっていました。今はカルデラとして有名な阿蘇山ですが、大昔にはカルデラはなく、その範囲の中に5つの活火山があったと考えられていて、今の阿蘇山とは全く違う姿をしていました。

9万年前のある時、阿蘇の火山はいっせいに噴火し、大量の火山灰や軽石かるいしなどを地上に噴き出しました。それと同時に地下のマグマだまりが空っぽとなってしまったために外輪山より内側は大きく陥没して現在の形となりました。この大噴火は阿蘇山では4回目だったので、阿蘇4噴火よんと名づけられています。

日田市の中心部に立ってまわりをながめると、30mほどはありそうな高さの急な崖がけが盆地の周りを囲んでいることがわかります。この崖の上は平たくなっていて台地といえます。日田の人たちはこの台地を方言で「○○原（ばる）」と呼んでいます。この台地は阿蘇山の大噴火により噴き出した堆積物がもととなってできています。その後、周囲から流れ込んできた雨水や川などによって台地が削り取られた結果、今の日田盆地の地形となりました。この時に、削られずに残った小高い丘を日田の人たちは隈くまといい、それぞれに名前をつけて、「月隈山つきくま」「星隈山ほしくま」などと呼んでいます。

ところで、火山が大爆発を起こすときにマグマの一部と火山ガスが一緒になって猛スピードで地表面を流れ下る現象を火砕流かさいりゅうといえます。近年では長崎県雲仙の普賢岳ふげんだけで見られましたが、阿蘇4噴火の火砕流はその100万倍の規模であったと考えられています。その威力をもの語るものが小野川で発見された埋没樹木群まいぼつじゅもくぐんです。この埋没樹木群をよく見ると、

木が全体に焼けこげており、木の根っこがなく、木の幹がどれも楕円形をして、覆い重なるように堆積しているなどの特徴が見られます。この時の火砕流は木を燃やすほどの高い熱を帯びていて、立っていた樹木をなぎ倒し、圧力でその幹を押しつぶし、津波のような勢いで木々を小野の谷の標高の高いところまで運んでいったのです。

日田から阿蘇山までは直線で60kmも離れていますが、9万年前の阿蘇山の大噴火の火砕流は遠く離れた日田盆地を埋め尽くし、当時の日田の自然環境やそこに暮らしていた動物たちにも大きな影響を与えたことを日田の台地や小野川埋没樹木群は教えてくれています。



約9万年前に噴火したと考えられる阿蘇4噴火は、噴煙を地上から1万メートルの高さまで上げ、火山灰は遠く北海道まで運ばれ、大量の火砕流は、四方八方に流れ、九州の半分以上を覆い、遠くは山口まで達しました。

このすさまじい噴火によって当時の自然環境は一変したと考えられます。

津江の自然

日田盆地の周りには、北に岳減鬼山がくめきざん、南には御前岳ごぜんだけ、釈迦岳しゃかだけ、渡神岳とがみだけ、酒呑童子山しゅてんどうじさんなど標高1,000mを超える高い山々がそびえています。これらの山々には太古の昔から自然のままの状態を保ってきた原生林と呼ばれる森が戦前まで広がっていました。

しかし、近年になって人々の活動が盛んになると、原生林の森は1本また1本と切り倒され、それにかわって杉や檜ひのきなどが人工的に植林されるようになり、森の姿は次第に変わって行きました。こうした中で、今も人の手が加えられていない貴重な原生林が前津江町の御前岳と釈迦岳一帯には残っています。

御前岳や釈迦岳の原生林は尾根筋や山頂にかけて広がるブナ林と御前岳北側の谷沿いに広がるシオジ林が大部分を占めています。ブナは北海道から九州に分布しますが、九州では標高1,000m以上の高い山地にしかなく、ブナ林として分布しているところは九州ではとても珍しいものです。一方シオジは関東から西の地方に分布しますが、この木も木材の材料として切り尽くされており、このようにまとまったシオジ林は全国的にも珍しいものとなっています。

また、この森はほかにもミズナラやカエデの仲間をはじめとした冬に葉を落とす落葉広葉樹で構成されており、初夏の若葉や秋の紅葉は美しく、マンサク、ヤマボウシ、ミツバツツジ、ツクシシャクナゲをはじめ四季折々に美しい花を咲かせる植物も豊富に見られます。「御前・釈迦岳の自然調査」ではシダ植物と種子植物、合わせて800種以上が確認されたほか、こうした植物群のもと、動物も昆虫類が370種、クマタカやハイ

タカをはじめとする鳥類が93種、テンやムササビなどのほ乳類が24種確認されています。

このような豊かな自然の森がここに残った理由は次のように考えられます。御前岳（権現岳）や釈迦岳の名前からわかるようにこの地が古くからの山岳仏教とも関係の深い神聖な場所であり、地域の人々もこの山を信仰の対象として大切に守ってきたことがあげられます。また、江戸時代には日田代官が、人が自由に入ったり木を切ったりすることのできない特別な森として管理しました。その後の明治以降になっても国有林として今日まで大切に保護されてきたためです。津江地域には様々な理由によってほかにもお宮や神社などに大切な木や森が守られています。

先人たちが私たちに残してくれた大切な自然を残すことは多くの生物の環境を保護し、その種の命を滅ぼすことなく守っていくことを意味しています。豊かな森は人々の心の豊かさや命のつな繋がりの大切さを伝えてくれているのです。



シオジ原生林は西日本では唯一の群生林で、広さは約30haにもなります。ここから湧き出る水は「御前岳湧水」と呼ばれ大分の名水に選ばれています。この湧水は、川となって下流の筑後川へと流れ込んでおり、筑後川の源流の一つに数えられています。

先史時代の暮らし

日本列島で人々の暮らしが確認されるのは約3万8千年前の旧石器時代きゅうせっきじだいからといわれています。氷河期ひょうがきであったこの時代は、現在より海面かいめんが100mも低く、アジア大陸りくつづと陸続きでした。日本人の祖先そせんはナウマン象ぞうやオオツノジカといった大型動物おおがたどうぶつを追いかけながら日本に移動いどうしてきました。人々は動物や植物えを得るための道具を石などで作り、食べ物を追いかけて移動いどうしながら暮らしをしていました。

日田では約3万4千年前の火あつを使った跡あとが発見はっけんされた高瀬川たかせ遺跡いせきなどの旧石器時代きゅうせっきじだいの遺跡いせきが、天瀬町あまがせまちの五馬台地いつまだいちを中心にたくさん見つかります。なかでも、約1万8千年前の亀石山遺跡かめいしざんいせきでは数万点すうまんてんに及ぶ狩猟用およの石器せっきづくりの跡あとが発見され、狩りさかが盛さかんだった様子ようすを知ることができます。

こうした暮らしくが続いた後あとに、人々は画期的な道具かっきてき どうぐである縄文土器じょうもんどきを発明はつめいします。縄文時代じょうもんじだい（今から約1万2千年前）のはじまりです。土器どきの出現しゅつげんによって、食べ物ちよぞうの貯蔵うんぼんと運搬うんぱんが可能かのうとなり、さらに煮炊きにたなどの新たな調理方法あら ちょうりほうほうが生み出されることで、暮らしゆたが豊かになります。また、道具かくにも革命かくが起きます。遠くとほの獲物とほを狙うことのできる弓矢せきぞく（石鏃せきぞく=やじり）の発明はつめいです。こうした新たな道具じょうもんじんが縄文人じょうもんじんの豊かな暮らしさまざまを支え、様々な文化ぶんかを生み出しました。

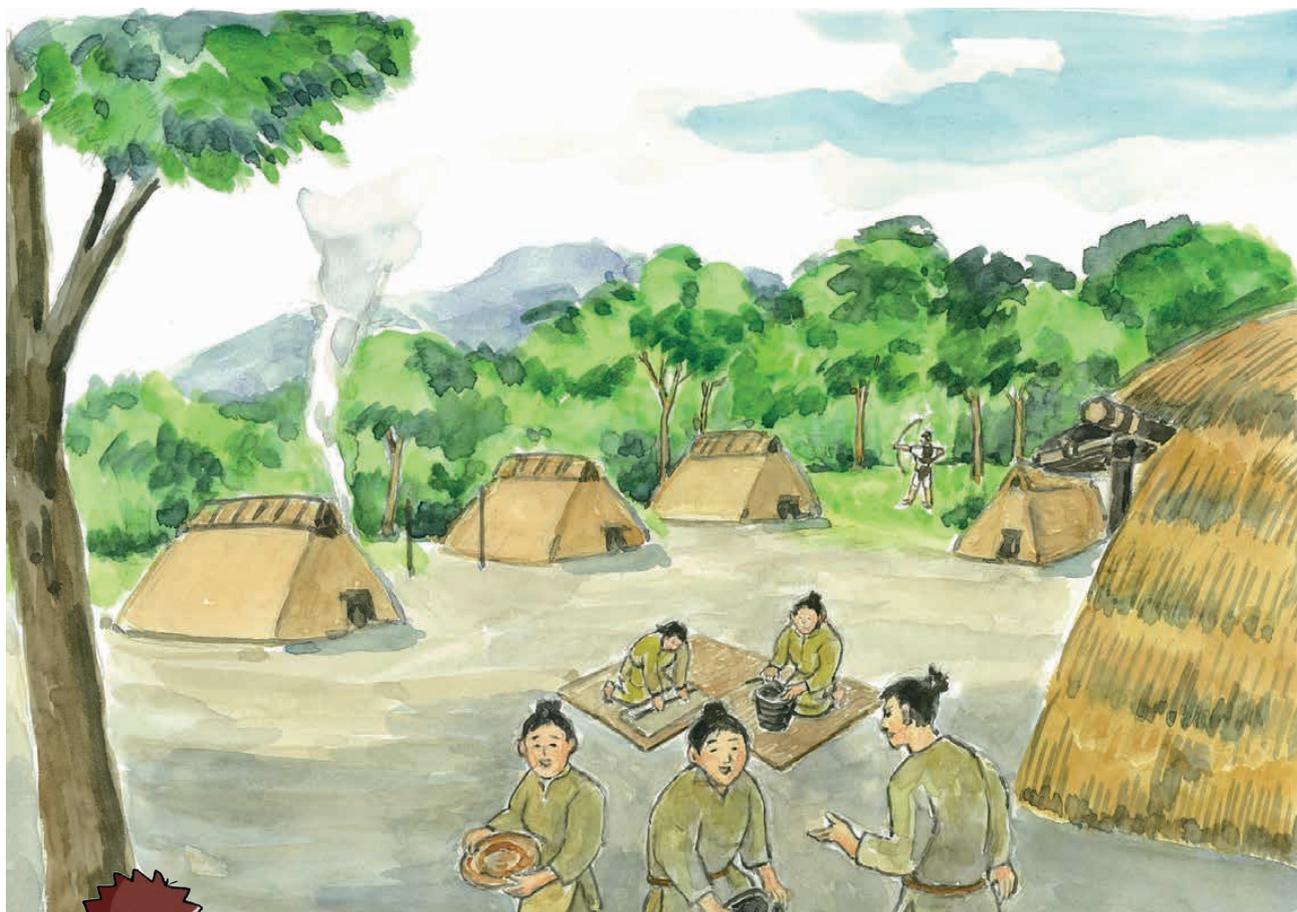
日田では、五馬台地いつまだいちのほかに、大肥川おおひがわや高瀬川たかせがわなどの周囲しゅういでも、縄文土器じょうもんどきなどが発見はっけんされます。旧石器時代きゅうせっきじだいに比べて暖かくなつたこの時代じだいには、食べ物たべものを得やすい川がわのそばで暮らしあたたし始めたのでしょう。

また、暮らしくらしが豊かになると、人々は地面じめんを掘り柱はしらをたて

屋根をかけた家を作って生活するようになります。竪穴住居たてあなじゅうきょの出現しゅつげんです。大山町おおやままちの中川原なかがわら遺跡などでは竪穴住居や煮炊きにたをした炉ろの跡あとが発見されています。

そのほか、三和教田遺跡みわきょうだや上井手遺跡かみいででは縄文時代の祭りじょうもんじだいまつや祈りいのに使用する土偶しゅうどぐうが発見されており、日田の縄文人が豊かな祈りの心を持っていたことを教えてくれます。

こうした縄文文化が、大陸から伝わる新たな文化と融合じょうもんぶんかたいりくつたあらぶんかゆうごうし、弥生人やよいじんへと引き継つがれていくのです。



縄文時代になると、調理技術ちょうりぎじゆつが発達し暮らしが豊かになったと考えられます。人々が竪穴住居たてあなじゅうきょを作って定住ていじゅうするようになった様子ようすを描いています。

吹上のムラと環濠集落

稲作が開始される弥生時代には、石をみがいた磨製石器や青銅器・鉄器といった道具類が中国や朝鮮半島から伝来しました。縄文文化と融合して独自の文化が作られ、先進的な文物によって、大きく高まった生産の技術は、食料の確保や多様な手工業の発展を促します。集団で農業を行い、ムラ（集落）は大型化し、吉野ヶ里遺跡に代表されるような、大規模な濠を巡らした集落が営まれ、北部九州の各地で、有力者のお墓が出現しました。生活の向上によって、階層が生まれ、『金印』で知られる『奴』のようなクニが誕生する時代です。

弥生文化の先進地域は、大陸に面した福岡や佐賀などの地域でした。地理的に近い日田にも、いち早くその文化が伝来します。徳瀬遺跡や吹上遺跡などで早くから弥生の集落がつけられ、北部九州の弥生土器や、福岡市や飯塚市で作られた石器などが出土するなど、交易が盛んな様子わかります。木製農具や農業用堰などが発見された大肥遺跡は、北部九州と同じ頃に米作りが始まったことを教えてくれます。

吹上遺跡は、約500年の間人々が暮らす、日田で最も古くて大きな弥生集落の一つです。住居跡のほかに、穀物を貯蔵する施設なども多数発見されています。紀元前1世紀～紀元前後頃には、鉄製や青銅製の武器、南海産の貝輪や勾玉、ガラス製の管玉などの装身具類など、交流・交易によって手に入れた豪華な副葬品を持った人物を、甕型の棺に葬ったお墓が造られたことが発掘調査でわかりました。ここに葬られた有力者がいることで、日田の地にもクニのようなま

とまりができつつあったことがわかります。そして、豪華な
ふくそうひんるい おおやままち いしいまち どうほこ けんい まつ
 副葬品類は大山町や石井町に伝わる銅矛と共に、権威や祭
しょうちよう
 りの象徴として利用されたのでしょう。2～3世紀頃には、
だいち めぐ ちようじゃばるいせき みわきようだいせき
 台地を巡る濠をもつ集落が長者原遺跡や三和教田遺跡などで
しゅうらく
 作られます。日田の各地で人々が大きな集落をつくり、暮ら
 していたことが分かります。

こうした有力者の墳墓や環濠集落が、古墳や豪族居館へと
ゆうりよくしゃ ふんぼ かんごうしゅうらく こふん ごうぞくきょかん
 姿を変え、卑弥呼の登場へとつながっていくことになるので
すがた ひみこ どうじょう
 す。



やよいじだい
 弥生時代になると、中国からつたわったコメ作りが始まります。じょうもんじだい
ちが 縄文時代と
きようどう のうさぎょう しゅうらく
 違い、共同で農作業をするために大きな集落が作られ、クニのようなまとまり
 が作られていく様子を日田の吹上遺跡を中心にえが描いています。

【コラム 金銀錯嵌珠龍文鉄鏡】

この鉄鏡は今から2,000年ほど前の中国の王朝、後漢の時代に作られたものです。鏡の直径は21.3cm、厚さは2.5mmと薄いものです。表面は全体の半分以上がはげ落ちていて、図柄の全体の様子を復元することは難しいのですが、残っている部分で、大体の図柄を読むことができます。

鏡の縁には竜の文様が変形したと思われるうずまき状の雲の図柄があり、その内側に金銀の細い線で雲と竜の文様が重なっています。竜の目や体の一部には赤や青の玉がはめ込まれています。鏡の中央にある紐（ひもを通す部分）の周りには、四枚の葉が描かれ、金文字で「長」「宜」「孫」の三文字がみえます。この文字は、子孫の代まで末永く、という意味がこめられた、おめでたいお祝いの言葉である「長宜子孫」のうちの三文字です。四枚の葉の周囲には金銀の二本の線があり、その内側にうずまき状の雲の図柄があり、中心にガラス玉をはめ込んでいます。

このように後漢の時代に製作された、金銀や玉をちりばめた鉄鏡は、中国でも珍しく、国内では唯一のものであることから、1964（昭和39）年1月28日に国の重要文化財に指定されました。

この鏡は、1933（昭和8）年の久大本線の工事の時に、日高町の豊後三芳駅近くのダンワラ古墳から出土したといわれていますが、工事で削られてしまったため、この古墳の詳細はよくわかっていません。

また、鏡と同じような細工が施された、金錯鉄帯鉤といわれる、今でいうベルトのバックルにあたる3点が、刃連町で出土したと伝えられています。この帯鉤は鏡と同じく、漢の

時代に作られたと考えられ、出土した場所も近いことが注目されます。帯鉤と鏡は何らかの関係があるかもしれません。

この鉄鏡や帯鉤が日田の地から出土していることは確かですが、どのようにして日田に伝わったのか、謎に満ちた世にも珍しい鏡を持っていた人は、どんな人物なのでしょう。鏡にまつわる古代ロマンに興味を尽きません。



古墳時代のはじまり

イネ（稲作農耕）と鉄（金属器）に象徴される弥生時代。わが国や郷土日田の社会の仕組みや人々のくらしは大きく変わりました。この新しい社会を優位に生きぬくためには、特に「鉄」を手に入れることが必要でした。このころ、朝鮮半島南部に良質の鉄資源がありました。そのため、この鉄の素材や製品を手に入れるために、朝鮮半島のクニとの交易が必要となりました。そこに外交や貿易という、これまでにない新しい国際関係も生まれたのです。

そうした中で、日本列島の各地に国ニクニが形成されました。当時の中国の歴史書によれば3世紀はじめのころ、日本列島には大小30余りのクニがありました。

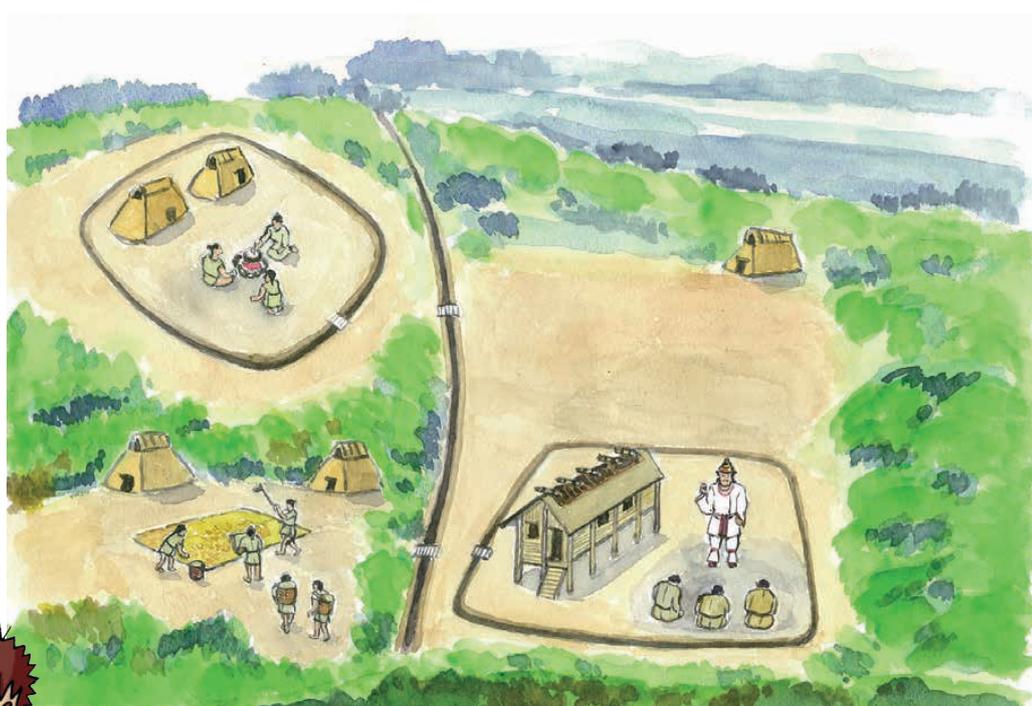
そして3世紀の後半ごろ、近畿地方に突如として大型の墳墓、つまり前方後円墳とよばれる古墳が出現しました。最古の前方後円墳と見られる奈良県の^{はしはか}箸墓古墳は、全長270mに及ぶ大きな古墳でした。

この時出現した前方後円墳は単なる首長の「墓」ではありませんでした。少なくともこの古墳の出現したころは、それは首長の権力を継承する儀礼の場であるとともに、新しい首長にしたがうことを誓う儀礼の場でした。このような前方後円墳の出現は、弥生時代までのクニグニをひとつに統合した国家ニヤマト政権の誕生を告げるものでした。

このころ、全国各地に出現していた地域の支配者ニ首長たちは、このヤマト政権の体制に参加し、あるいは組み込まれていきました。これらの首長たちもヤマト政権をまねた前方後円墳を次々につくりました。

大分県下では、県北の宇佐地方や国東半島などの海岸部に、最も古い前方後円墳がつけられました。日田地方にも有田の城山古墳しろやまや石井の護願寺古墳ごがんじ、朝日の朝日天神山古墳あさひてんじんやまなどの前方後円墳がありますが、今までのところ、確実に古墳時代のはじまりのころといえる前方後円墳は確認されていません。

そうした中で、小迫辻原遺跡おぎこっじばるでは、1988（昭和63）年、大分自動車道建設にともなう発掘調査で、古墳時代の首長の館きょかん（居館）の跡が発掘されました。ここでは、まわりに方形の溝ほうけい（環濠）をめぐらした居館が、東から1号、2号、3号と並んで発掘されました。これらの居館跡は、環濠の底でみつかった土器により、3世紀末～4世紀のはじめ、つまり古墳時代のはじまりの頃のものとなりました。小迫辻原遺跡は、その後、「国指定史跡」となり、現在、遺跡全体を史跡公園として整備する計画が進められています。



古墳時代になると、クニをまとめる指導者が現れるようになります。日田の小迫辻原遺跡では、当時の日田を治めた人物の住まいと考えられる集落が見つかりました。

前方後円墳の時代

ヤマト政権は3世紀終わりごろには、統一王権としての一歩を踏み出しました。その後5世紀にかけて、ヤマト政権はさらに勢力を強めていきます。このころの政権の頂点に立った「大王」の墓＝前方後円墳は、その勢力の拡大を誇示するかのようさらに巨大な古墳となり、「巨大古墳の世紀」と呼ばれる時代が到来します。

しかしその後、ヤマト政権がたどった足取りは決して平坦なものではありませんでした。初期のヤマト政権には、王朝の交代ともとれる出来事があったらしいことが、『古事記』や『日本書紀』などの歴史書の研究によって指摘されています。

これを証明するかのよう、4世紀代と5世紀代とでは、大王の墓のつくられる場所が大きく移動しているのです。4世紀ごろの大王の墓は、奈良県の^{やまと}大和盆地の^{やなぎもと}柳本古墳群などに集中していますが、4世紀末から5世紀にかけての時代の大王の墓は大阪府の^{ふるいち}古市古墳群や^{もす}百舌鳥古墳群に集中しています。このうち仁徳天皇の墓と伝えられる^{だいせん}大仙古墳は、周りの濠まで入れると全長600mに及ぶ世界最大級の古墳です。

こうした中で、ヤマト政権の^{さんか}傘下にあった大分県の各地でも、次々に大型の前方後円墳がつけられました。大分市の^{ほうらいさん}蓬萊山古墳や^{かめつか}亀塚古墳、臼杵市の^{うすつか}臼塚古墳や^{しもやま}下山古墳などです。

日田の前方後円墳で、特に注目されるのは^{あさひてんじんやま}朝日天神山古墳1・2号古墳です。この古墳は日田盆地の北西部の台地上

にあります。1・2号ともに6世紀中ごろから後半の古墳です。1号古墳は全長30mほど、天満社の社屋建設の際、石室が発見され銅製の鏡や馬具などが出土しています。一方、2号古墳は周溝まで加えると全長80mを超え、日田地方では最も規模の大きい前方後円墳です。

朝日天神山古墳では、^{みわだま}三輪玉と呼ばれる水晶の玉が出土しました。これは、ヤマト政権の中でも大王や、これに次ぐ有力者の持つ刀を飾ったものです。朝日天神山古墳に葬られた首長がヤマト政権と特に深い関係にあったことを証明する遺物といえます。

このほかでは、前方後円墳ではありませんが、天瀬の五馬にある^{うどこふんぐん}宇土古墳群では、5世紀中～後半の古墳から計5体の人骨が出土しました。この古墳は女性の首長の墓でした。『豊後国風土記』には、昔、五馬地方に五馬媛（イツマヒメ）という女性の首長がいたと記されていますので、宇土古墳の女性首長の墓との関係が注目されています。



日田市内最大の前方後円墳である朝日天神山古墳群。現在の朝日町の北側に広がる宮原台地の南側に造られました。2号墳、1号墳の順に造られ、当時の日田を治めた首長の墓と考えられます。

装飾壁画の世界

3世紀後半、近畿地方きんきちほうに造られた大型墳墓おおがたふんぼ（前方後円墳ぜんほうこうえんふん）から始まる古墳時代は、約400年間続きます。

長く続く古墳時代の中で、古墳は形を変えていき、5世紀代にはお墓の中に彫刻や彩色いろどを施して彩る「装飾古墳：装飾壁画そうしょくへきが」が造られるようになります。

「装飾古墳」は、日本全国で約660基以上見つかっていますが、九州ではその内の半数以上になる約380基が見つかっています。

「装飾古墳：装飾壁画」は、九州の福岡県から熊本県（北部と中部）にかけての河川流域かせんりゅういきを中心に分布ぶんぷしており、5世紀代から7世紀初頭まで様々な形で存在しています。

当初の装飾は、石室内にある遺体を入れる石棺せっかんや板石いたいしなどに彫刻し、彩色ほどこを施すものでした。そこに描かれる彫刻は、「直弧文ちよっこもん」（直線と弧線とを組み合わせた文様）や「鍵手文かぎてもん」（直角に交差する線を組み合わせてそれを小さく細長くした文様もんよう）など複雑な文様が描かれていました。

その後、こうした装飾に変わって石室の壁全体に装飾を施すものが出てきます。それは、「同心円文どうしんえんもん」（丸を重ねたような文様）や「蕨手文わらびてもん」（ワラビの形に似た渦巻き状の文様）といった単純な文様から船・太刀・盾・弓などの物が描かれるようになります。最も盛んな時期には、人物や動物などが加わり、種々の彩色をし、様々な図形や絵画が描かれるようになります。こうして描かれる装飾の変化には、亡くなった人に対する思いの変化が表れているのかもしれませんが。

このような広がりを見せる装飾の文化は筑後川流域ちくごがわにも広

がり、6世紀後半代には日田地方にまでその影響を及ぼすこととなります。

日田市でも、ガランドヤ古墳1号墳・2号墳（石井町3丁目）、穴観音古墳（大字内河野）、法恩寺山古墳3号墳（刃連町）の4基の装飾古墳が見つかっており、これらはいずれも国の史跡の指定を受けています。



日田市内で4基確認されている装飾古墳には、様々な模様が描かれています。これには、お墓の中の人物を邪悪なモノから守るため、または死んだ後の世界を表したものではないかと言われています。

古代の役所と石井駅

「古代」という言葉にはひろく「大昔」という意味がありますが、ここでいう「古代」とは、天皇が実際に政治を行っていた「飛鳥時代・奈良時代・平安時代」、おおよそ中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我氏を滅ぼした大化の改新（645年）から源頼朝が鎌倉幕府をつくり征夷大將軍となるまで（1192年）をさします。それまでの各地の豪族を中心とした小さな支配から、当時の中国（唐）にならって律令（法律）に基づく天皇中心の国づくりが進められた時代といえます。例えば現在、人が誕生したり死亡したりすると、市役所で法律に決められた手続きをします。この「市役所」や「法律」が日本ではじめてつくられたのがこの時代です。また、この仕組みで全国を治めるには、役人を各地へ派遣するための道路をつくる必要がありました。現代でいう「国道」には約16kmごとに「駅」がつくられました。「駅」とは、交通手段としての馬と宿泊施設をそなえ、国の命令を受けた使者や役人だけが利用できる特別なものでした。

これらの施設を整えることにより、天皇（朝廷）が全国民を直接治めていたのですが、日田市でも「役所」「駅」と考えられる遺跡がいくつも見つかっています。

日田高校のそばにある大波羅遺跡では、一辺1mもある大きな四角い柱穴と直径30cmを超す当時の大きな柱木が並んで見つかかり、すずりとして使った土器も出土しました。普通の民家ではこのような柱は使われず、また文字を書けるのは役人ぐらいだったので、役人がいた場所、すなわち当時の日田郡の役所跡と考えられています。また大波羅遺跡の北

側、慈眼山じげんざんのふもとにある慈眼山遺跡では「林」「門」と文字の書かれた土器が見つかり、やはり役人の存在をうかがわせます。そのほか小迫辻原遺跡おぎこつじばるでも、郡の役人の位の名称である「大領」たいりょうの文字を書いた土器や規則正しく並んだ建物跡が発見されています。

一方、三隈川の南側、上野浄水場付近うえのじょうすいじょうにある上野第1遺跡では、古代の道路跡と倉庫群や「豊馬豊馬」とよめとよめと文字が刻まれた石製品が出土しました。三隈川の南岸は古代は「石井郷」いしいごうといわれており、「馬」の字が見えることから、『延喜式』えんぎしきという法律の集大成に記されている、日田郡内に設置された「石井駅」ではないかと考えられています。この石井駅を通過して、古代の役人が九州全体を取りまとめていた役所である大宰府だざいふと各地を行き交っていた様子が目に浮かぶようです。



日田高校（上城内町・田島2丁目）の近くの大波羅遺跡では、市役所の先祖にあたる、奈良時代ごろ（約1,250年前）の役所の跡が見つかりました。墨すずみをすった土器などが出土しており、読み書きのできる役人がいたようです。

武士の登場と大蔵氏

11世紀になると日田の支配権力は日下部氏から大蔵氏へと移行しました。日田地域でも小領主がそれぞれの土地を所有し、新たな土地の開墾を進めていきます。大蔵氏はそのような小さな領主たちをまとめ、日田郡の司（長官）になりました。

当時の貴族の日記である『中右記』の1095（嘉保2）年8月10日条に日田殿（どん）と呼ばれる大蔵永季が登場します。1194（建久5）年鎌倉幕府から日田の地頭に任ぜられ、名実ともに日田の領主になりました。

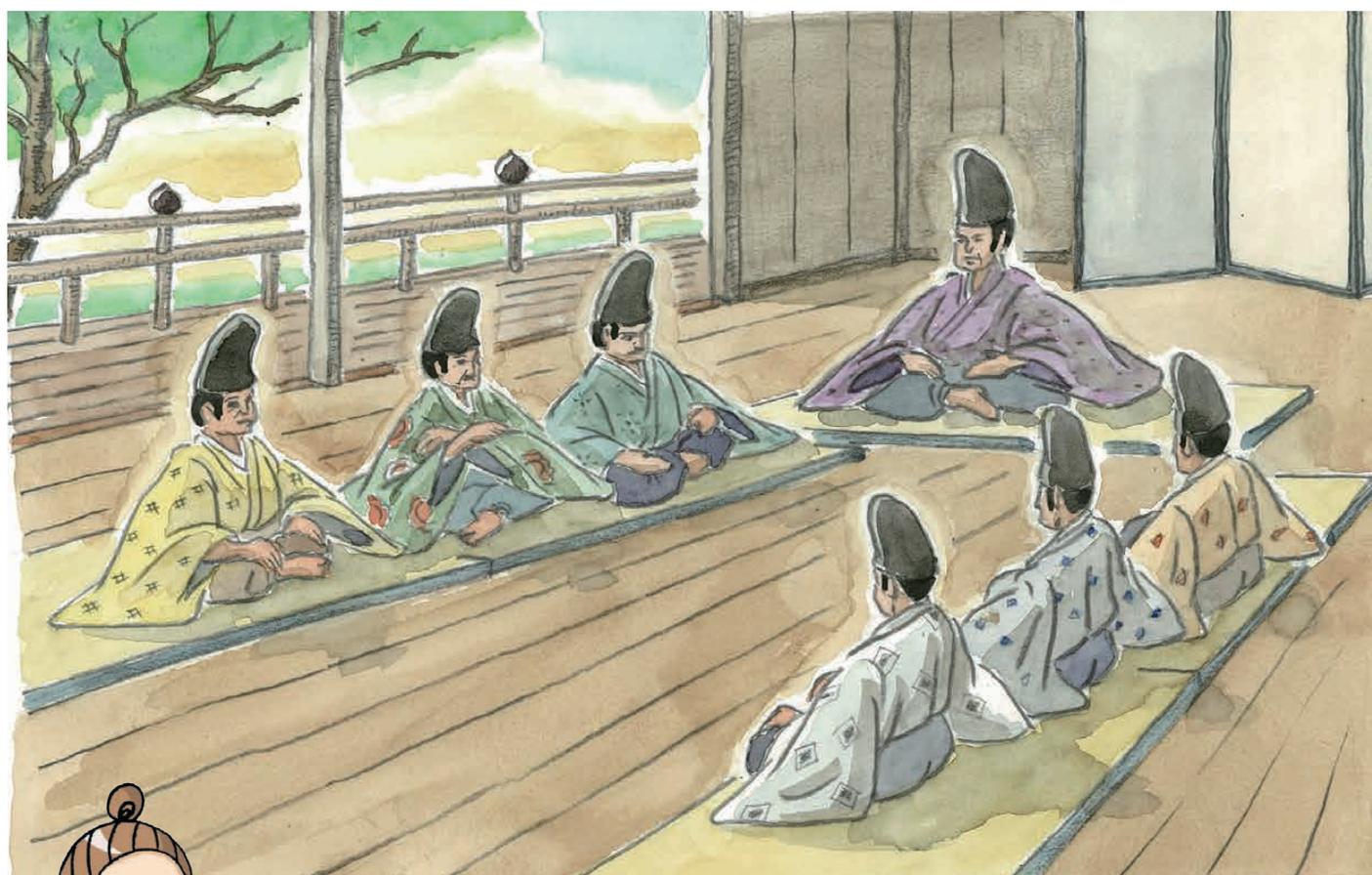
『弘安凶田帳』（1285年）では日田郡は560町の内、日田荘500町、大肥荘60町（太宰府安楽寺領）となっています。また日田荘内450町は地頭職日田永基、残りは宇佐宮領の竹田、由布、石井、今泉、田島別符と得善名（弥勒寺領）と、日田は三つの支配地となります。

1274（文永11）年、蒙古襲来の際には、異国警護番役を命じられたり（『日田郡司職次第』に書いてある）「日田二、三百騎ニテ」と日田氏の参戦について記されています。

南北朝時代の日田氏は北朝に味方しました。当時の日田に残る年号が北朝年号であることが証拠です。また室町4代将軍義持の奉公衆百余名の内に日田氏（永息）が選ばれており、幕府とのつながりもうかがえます。日田の在地の武士たちは大蔵氏の指揮の下で蒙古と戦ったり周辺の武士勢力とも戦いました。

大蔵氏の家系は1444（文安元）年に断絶し、大蔵氏をついだ大友系日田氏も1546（天文15）年に断絶し、日田は坂本、財津、堤、高瀬、羽野、石松、佐藤、世戸口の8

人の日田の有力武士たちによって治められました。以後、豊臣秀吉による大友氏の領地没収まで大友配下として、筑前・筑後の戦いをはじめとして各地の戦いにあけくれることになります。



日田の有力武士たちによる合議制の支配が行われる以前は、イラストのように領主であった大蔵氏が武士たちをまとめ、日田を治めていました。

【コラム 大蔵氏の館】

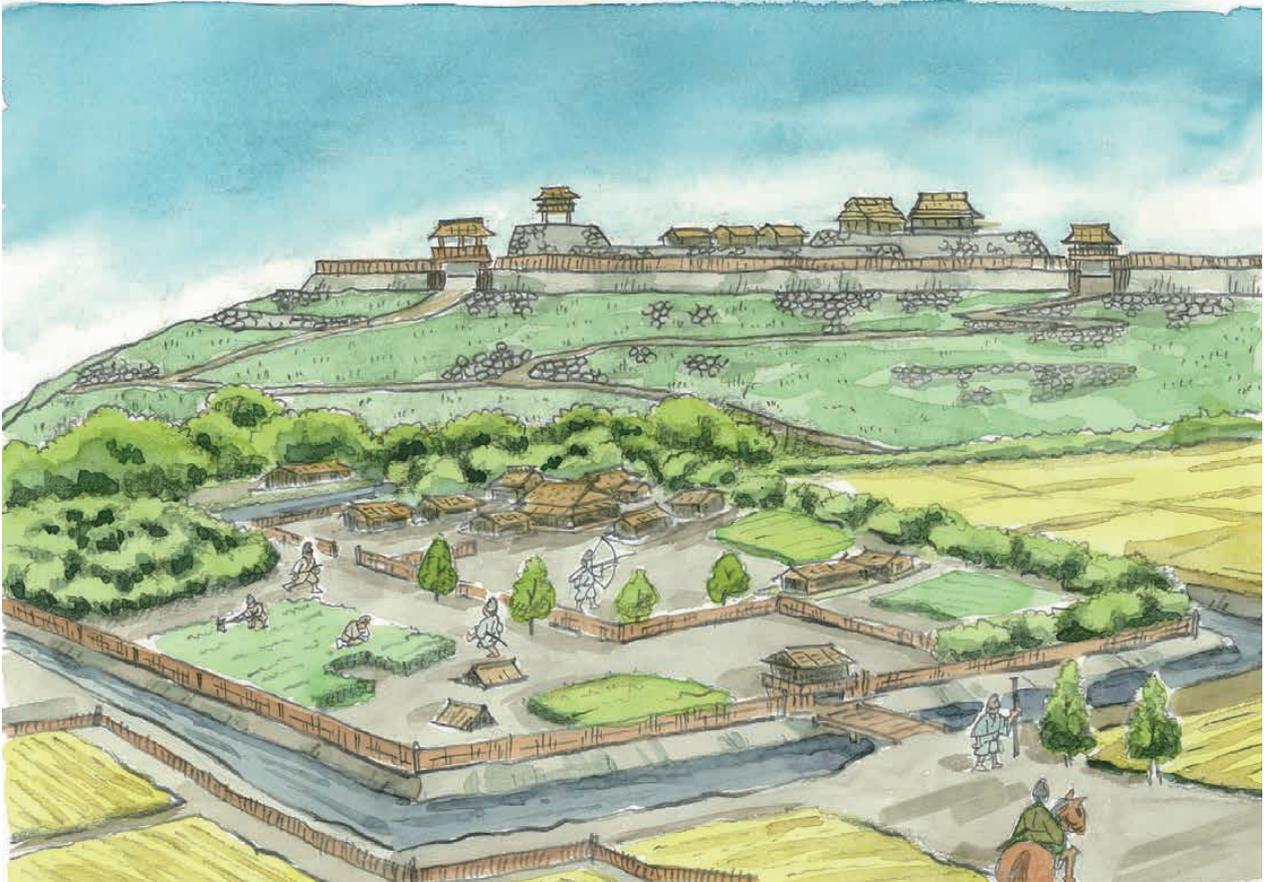
今から1,000年ほど前の日田盆地を支配していた大蔵氏は、どのような暮らしをしていたのでしょうか。その一部が、最近の発掘調査から明らかになってきています。少しのぞいてみましょう。

大蔵一族は花月川のそば、桂林校区にある慈眼山に城をかまえ、本拠地としていました。現在慈眼山の中腹には永興寺の仏像収蔵庫があります。永興寺自体はそもそも「日田どん」大蔵永季が父を供養するために延久年間（1069～1073年）に建立したお寺といわれています。

収蔵庫には当時の都である京都や奈良の仏師により造られた国指定重要文化財の仏像群が安置されており、日田一帯を治めた大蔵一族の栄華と財力を今に伝えています。ところで城といっても、慈眼山には熊本城や大坂城のような天守閣などはありません。大蔵氏のころの城は山を切り開いて平らな場所をつくり、建物は穴を掘って柱を立てた「掘立柱建物」という簡単なもので、住み暮らすための施設ではなく、戦いのときにだけ立てこもり、拠点とするための施設でした（普段は山のふもとの屋敷で生活します）。このとき山をけずってつくられた平地の区画（曲輪）や土盛りの防御壁（土塁）などは今でも慈眼山に残っており、見ることができます。また慈眼山の頂上付近には「高城」「古城」などの古い地名が残っており、ここに城があったことを裏付けます。

地名といえば、慈眼山から桂林小学校付近にかけて、武士の屋敷地など関係のありそうな「羽野殿屋敷」「上ノ馬場」といった小字名が見られます。発掘調査ではそのことを示す

ように屋敷の区画溝やその内側に規則正しく並んだ建物の
 柱穴、素掘りや川原石を積み重ねてつくった井戸など、当時
 の武士の生活がしのばれる痕跡が多数見つかっています。また、
 当時の人々が使った素焼きの土器のほか、当時世界最先
 端の文化を誇っていた中国からの輸入陶磁器類、大蔵一族や
 その家臣の屋敷の屋根に使われていたであろう瓦や、しゃも
 じ・箸・漆器などの木製品、中国からの輸入銭、刀の飾りや
 鎖のような金属製品といった生活道具や農具・武具など多彩
 な遺物が出土しています。毬や独楽などの娯楽道具もみつか
 っており、日々の暮らしや戦いに明け暮れながら、ときに遊
 びも交えていた当時の人々の、いきいきとした生活ぶりを想
 像させます。



慈眼山の南側ふもとから桂林小学校付近にかけてひろがる慈眼山遺跡では、大蔵一族やその家臣の屋敷のあとが見つかりました。普段はここで暮らしながら、戦いのときには慈眼山（大蔵古城）に立てこもったようです。

大蔵永季と相撲節会

通称「日田どん（殿）」、本名大蔵永季は日田の人々には「相撲の神様」として親しまれています。言い伝えによれば10数回の優勝を誇るたいへんな強力の持ち主とされています。

伝説の人ですが、当時の貴族の日記にその名前が残ることで実際に存在した人であることがわかります。

生まれたのは1056（天喜^{てんぎ}4）年と伝えられます。日田の伝説では1071（延久^{えんきゅう}3）年16歳で宮中の相撲の節会^{せちえ}に召されたことや、出雲の小冠者^{こかんじゃ}との戦いの話などが知られていますが、史料での最初の確認は、1080（承暦^{じょうりやく}4）年からとなります。

伝説では、出雲の小冠者という鉄のからだを持つ無敵の相撲人に勝つ方法を旅の途中で神のお使いの少女から伝えられたという話が有名です。後に大原八幡社に奉納された絵馬にはこのときの戦いが描かれています。

当時の地方の武士たちにとって都で相撲をとるということは、単に力自慢をするということだけでなく、地域支配の上でも大きな意味を持つことでした。

中央の貴族につながりを持ち、天皇から位^{くらい}を授かることで地域の支配権力を確立できるという利益がありました。鬼太夫^{おにたゆう}という日田^{どん}殿の太夫の名は五位という下級貴族の通称名でもあります。日本国の支配のピラミッドの中に位置することになる名のりが伝えられるのです。実際の位は八位という一番下の位をもらっています。地方では現在の副知事や市長にあたります。

史料に書かれた最後の記述では、永季は1104（長治元^{ちやうじ}）

年ひだりに左最手ほて（最も上位の地位）として京都に行き、相撲節会に臨んだことが判明しています。その後、永季の名は出なくなります。

日田の伝説も同様に長治元年に都から帰る途中で、大肥わに鰯むらすずきの村薄で亡くなったと伝えます。相撲人として努力をすることが同時に日田の支配の安定につながることとなりました。

大肥の地で没したことは、将来も日田を守り続けるという日田どん殿の決意を伝えることになったのだと言えます。その意味では相撲の神様というよりも、日田の神様しそ（始祖）と呼ぶ方がピッタリかもしれません。今は日田神社（慈眼山麓）にまつられています。



永季は、16才の時に初めて相撲節会に呼ばれました。彼は順調に勝ち上がり決勝で出雲の「小冠者」と言われる強敵と戦い、見事に勝利を収めます。その後、35年間15回にわたって相撲節会に出場しますが、一度も負けませんでした。

津江山と太宰府天満宮

中世の時代、日田市の南部である前津江・中津江・上津江と北東に連なる大山にわたる一帯は「津江山」といわれていました。

初めて古文書などに「津江山」の言葉が確認されるのは、1225（嘉禄元）年5月頃、「津江山住人等」が畠を作っていた時に、銅銚2本を掘りあて、そのことを領主である安楽寺に報告したという記録です（『百練抄』1227（安貞元）年の記事）。

「津江山住人等」が報告した安楽寺とは菅原道真を祀っている、現在の太宰府天満宮のことです。明治時代の神仏分離令までは、天満宮安楽寺・安楽寺天満宮などと呼ばれており、「津江山」はその安楽寺（太宰府天満宮）が支配をしている荘園でした。

「津江山」が太宰府天満宮の荘園になったのは、平安時代末期ごろと考えられています。確認できるものは、鎌倉時代の記録である『百練抄』の記事のみですが、それから130年のちの南北朝時代の1352（観応3）年の太宰府天満宮の記録にも、「津江山」の記述がみられ、天満宮にとって「津江山」は重要な場所だったようです。

津江と太宰府天満宮の関係がわかる記録は余り残っていませんが、津江地域に広く分布している津江七社が太宰府天満宮との関わりを物語っています。

津江七社は7つの老松社を指しています。大野・赤石・柚木（以上前津江）、宮園・八所・中村（以上中津江）・浦（上津江）・中川原（大山）を津江七社と呼んでいます。

す。老松社の老松とは天神・菅原道真の家来の神でしたが、次第に天神と同一の神として祀られるようになりました。これらの老松社を津江地域に建てたのが日田郡司大蔵永季や津江長谷部氏だといわれています。

このように津江地域に多くの老松社が建てられたのは、「津江山」が太宰府天満宮にとって、重要な地域であったために老松社を建てたと思われる。また津江地域は雷が多いことから、雷の神様の要素をあわせ持っていた天神・菅原道真が老松神の名前で、津江地域の人々の信仰を集めたものとも考えられます。



現在の上津江・中津江・前津江・大山一帯は、「津江山」といわれ、福岡の太宰府天満宮の荘園でした。「津江山」には、天満宮の神を祭る老松社が建てられ、「津江七社」と呼ばれました。中でも前津江町の大野老松社は室町時代の本殿が残っており、大変貴重です。

蒙古襲来と日田

13世紀初めにモンゴル高原の遊牧民を統一したチンギスニハンはモンゴル帝国を築き、東ヨーロッパや西アジアまで勢力をのばしました。東アジアでも金や西夏をほろぼし、朝鮮半島の高麗も支配下におきました。1260（正元2）年に第5代皇帝に即位したフビライニハンは、外交関係や貿易などを求める国書を日本に送りましたが、その中には軍事攻撃をおわせるような文言が含まれていました。

朝廷や鎌倉幕府は返事をださないことにしましたが、モンゴル軍が必ず攻撃してくると考えて、九州在住の御家人や九州に領地をもつ武士たちに防衛を命じました。また日本全国の神社やお寺にモンゴル退散の祈祷（「異国降伏」）をすることを命じています。

その当時の日田の有力な領主で、京都の六波羅探題に務めていた日田大蔵氏の日田永信も九州防衛のために帰国を命じられたといわれています。

幕府の予想通り、1274（文永11）年10月初めにモンゴル・高麗の連合軍3万人が対馬・壱岐を制圧し、20日には博多に上陸をはじめました（文永の役）。これに対し防衛にあっていた九州の御家人たちとの戦闘が繰り広げられ、日田氏もこの戦いに参加し、日田永基が参戦していました。戦いは連合軍が優位に進めますが、その日の夜に連合軍は引き揚げて行きました。しかし、その理由は分かっていません。この戦いの恩賞として、日田大蔵氏は豊後国安岐郷（国東市安岐町）の一部を与えられました。

フビライはすぐに、再遠征の準備にとりかかり、また使者

を日本に送り、モンゴルの支配下に入るよう求めてきました。しかし、幕府はこれを断り、モンゴル軍の再襲来さいしゅうらいにそなえて、前回の戦場になった博多湾沿岸を防御するための石垣いしがきの建設を命じました。この石垣はのちに「元寇防塁げんこうぼうらい」とよばれ、その一部が現在も福岡市内に残っており、見ることができます。

1281こうあん（弘安4）年、ふたたびモンゴル軍が襲来しました（弘安えきの役）。モンゴル軍は1276けんじ（建治2）年に攻め滅ぼした宋そうの軍隊や高麗の軍をあわせた15万人で日本を襲おそいました。ところが、宋の軍隊と高麗の軍の合流が遅れたことや御家人たちが沿岸に築いた防塁のために、モンゴル軍は容易に上陸することができませんでした。またモンゴル全軍が博多を総攻撃するために集まっていたとき、台風の直撃にあい、大きな被害を受け、撤退てったいすることになりました。この戦いで活躍した日田氏は、筑前国の三奈木荘ちくぜんのかに みなぎ（福岡県朝倉市三奈木あさくらしみなぎ おんしょう）を恩賞として受けたといわれています。



弘安の役でも日田氏と思われる「日高三郎ひだかさぶろう」、「ひたの二郎じろうひてたた」などの人物が防塁たいきの上で待機している様子や、小船に乗り込みモンゴル軍と戦おうとしている様子が、熊本の御家人である竹崎季長たけざきすえながが作らせた「蒙古襲来絵詞もうこしゅうらいえことば」に描かれています。

日田の平安・鎌倉・室町時代

平安時代には浄土教、山岳宗教が人々の信仰を集めました。

日田の浄土教としては、南友田徳瀬とくせにある酒楽神社しゅらくに残る薬師信仰やくしを伝える「薬師三尊やくしさんぞん」や大蔵一族ほだいじの菩提寺ぼだいじである永興寺ようこうじの観音菩薩像かんのんぼさつ、また吹上観音などの観音信仰などが当時からの姿を伝えています。

特に永興寺には鎌倉時代の毘沙門天像びしゃもんてんや四天王像が伝えられ、当時の大蔵氏の権勢けんせいや武門の信仰がうかがえます。永興寺は大蔵氏の菩提寺であり、日田神社は氏神になります。

中世武士の城域には氏寺、氏神を祀ることが当時の習わしとなっていました。中世日田の宗教文化は大蔵氏を中心に栄えていきます。

山岳宗教の信仰は、小野戸山神社とやまが英彦山ひこさんとつながる信仰を伝えています。修験道しゅげんどう（神仏混淆しんぶつこんこう）の寺院としての歴史を伝え、小野地区を通り英彦山詣もうでをす人々が数十年前までありました。また大山鳥宿神社からとまりも英彦山信仰を伝えており、日田周辺の仏教に関連した名前の山々は山岳信仰のなごりと考えられます。

北友田にある岳林寺がくりんじは大蔵永貞ながさだが1342（康永元）年こうえいに後醍醐天皇ごだいごの祈願によって渡来した僧明極楚俊とらいを開基みんき そしゅん かいきとして創建されました。日田地方の臨濟禅寺りんざいぜんの名刹めいさつであり、当時の仏像などの文化財が数多く残っています。

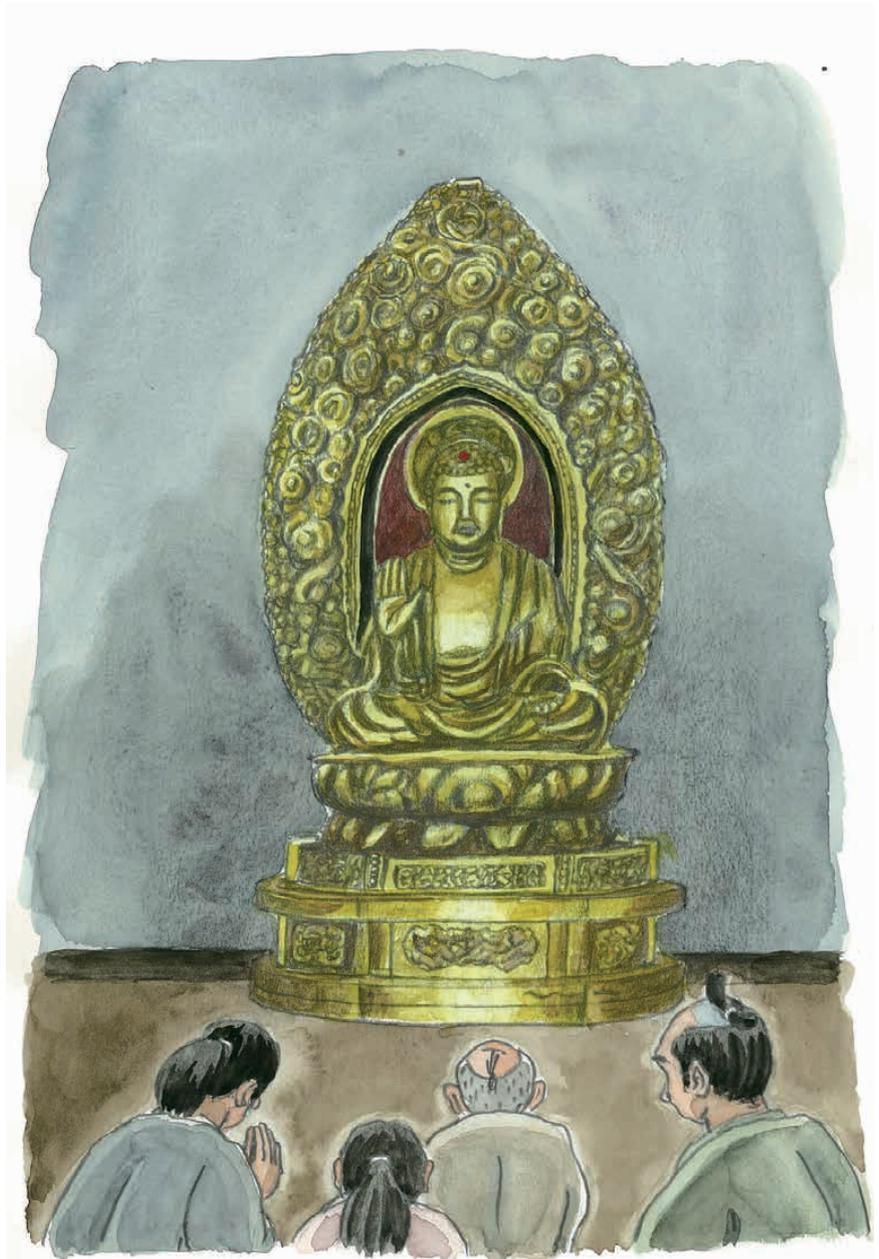
また財津龍林寺りゅうりんじ、諸留世尊寺もろどめせ そんじ、高瀬安養寺あんようじ、大山片瀬古かたせ この阿弥陀像などの仏像群は、当時の地域の小領主たちがそれぞれの菩提寺として建立した寺の由来によるものでしょう。

さらに市内の各所には、いたび板碑やまがいしゅじ磨崖種子をはじめとする石造物が残され、その時々地域の人々の信仰をうかがい知ることができます。

大肥、津江・大山は古代から太宰府天満宮の荘園としての歴史が長いことから、多くの天満宮があります。その関係でおいまつ老松神社のかけぼとけ懸仏や年中行事が伝えられ、この地域の独特の歴史を伝えています。

日田地域は、内陸部という地理的位置づけによって、他地域の文化を受け入れながらも、ゆるやかな変化・発展のなかで時代が進んでいったと思われます。

貴族や上級武士の信仰が大寺院や壮麗な仏像に象徴されるのに対して、下級武士や庶民の信仰は手近な石造物の造立へと向かいます。この頃になると石造物の数・種類は増えていきました。



室町時代の日田

蒙古襲来後、鎌倉幕府は、九州防衛に活躍した御家人や御家人以外の動員された武士たちへの恩賞の問題を抱えることになりました。またモンゴル軍への対応のため、將軍の補佐をする執権しっけんの北条家ほうじょうけ（得宗とくそう）に権力が集中することになり、多くの御家人らの不満をあつめることにもなりました。

そのようななか鎌倉幕府の打倒にたちあがったのが、後醍醐天皇ごだいごでした。天皇は、家がらにとらわれず、有能な貴族とうようを登用するなど、積極的に政治にとりくみ、天皇中心の新しい政治をめざしました。一度は、幕府倒幕の動きが発覚し、隠岐島おきのしま（島根県おきのしまちょう隠岐の島町）に流されますが、天皇の皇子であった護良親王もりよししんのうや河内国かわちのくに（大阪府南東部）出身の武士である楠木正成くすのきまさしげらが活躍し、ついに鎌倉幕府をほろぼしました。

この時、日田の有力な武士であった日田氏は、はじめは鎌倉幕府の御家人として幕府側に属して戦っていましたが、のちには天皇側に転じたようです。天皇は、鎌倉幕府を倒し、公家も武士も天皇が直接支配する新政治をめざした「建武の新政けんむしんせい」を行いましたが、長くは続きませんでした。それは鎌倉幕府の有力な御家人であり、天皇に味方した足利尊氏あしかがたかうじが、後醍醐天皇の急激な政治改革に不満を持った公家や武士たちの期待を集めるようになり、天皇に反旗はんきをひるがえしたからです。尊氏は後醍醐天皇によって天皇をやめさせられた光厳上皇こうごんじょうこうの弟である光明天皇こうみょうてんのうをたてて、1338（延元3）年えんげんに征夷大將軍せいゐたいしやうぐんに任命され、室町幕府政治むろまちぼくふがはじまりました。足利氏が將軍を務めていた期間（1336～1573）を室町時代といいます。

室町時代の日田においても、鎌倉時代と同様に大蔵姓日

田氏が有力な領主で、幕府の奉公衆（足利将軍に直接仕える）に任命されていることが確認できます。しかし1444（文安元）年頃、家督争いが起こり、大蔵姓日田氏が断絶してしまいました。そのため豊後国守護であった大友氏の一族が日田氏を継いで、大友姓日田氏を名乗ります。ところが1548（天文17）年頃、日田親将の時に大友氏本家の大友義鑑に対して、謀反を計画したことが露見し、親将は自刃してしまいました。それ以後、日田は大友義鑑が大蔵氏の一族や郎従の中から、坂本・財津・羽野・石松・高瀬・佐藤・堤・世戸口氏らを郡老（年寄）として日田の支配を任せ、この体制が1593（文禄2）年の豊臣秀吉により日田が太閤蔵入地（豊臣秀吉の直轄領）になるまで続きました。



鎌倉・南北朝時代ともに日田の中心的存在であった日田氏は、康永元年頃に岳林寺を建立しています。日田氏は足利将軍直轄の奉公衆に編成され、守護大名大友氏の支配を受けなかった存在でしたが、家督争いにより日田氏は徐々に衰退していきました。

豊臣秀吉時代の日隈城

むろまち だいまょう
室町幕府は「大名」とよばれる有力な武将たちを各地の
しゅご
守護に任命して、日本を治めていました。しかし15世紀
の後半には、有力な守護大名たちが東西に分かれて争った
おうにん
「応仁の乱」がおこり、その頃から幕府の力は弱まりました。
そして16世紀になると、日本各地に広い領域を支配する
せんごくだいまょう きそ
戦国大名があらわれ、それぞれの大名が勢力を競い合うよう
になりました。室町幕府はまだ存続していましたが、この時
期を戦国時代と呼びます。

16世紀の後半には有力な戦国大名が出揃うなか、特に
おわり でそろ
尾張国（愛知県）を本拠にしていた織田信長は、室町幕府
よしあき
第15代将軍足利義昭を京都より追い出し、天下統一をすす
めます。しかし信長は家臣の明智光秀に討たれてしまいます
あけちみつひで う
（本能寺の変）。その光秀は同じく信長の家臣であった羽柴
ほんのうじ へん はしば
（豊臣）秀吉に倒されます。秀吉は全国の大名たちを降伏さ
とよとみ ひでよし たお
せたり、攻めほろぼすなどして、ついには日本（天下）を統
一します。織田信長・豊臣秀吉が有力であった時代を信長の
あづち し がけんおうみはちまんし
居城があった安土（滋賀県近江八幡市）と秀吉が城を築いた
ふしみ ももやま あづち ももやま
伏見・桃山（京都市伏見区）から安土・桃山時代と呼びます。

日田にも豊臣秀吉の全国統一の影響が及びます。1593
ぶんろく ぶんごのくに よしむね
（文禄2）年5月、それまで豊後国を支配していた大友吉統
が秀吉の怒りをかったことにより、領地を取上げられてしま
いました。日田の多くの武士は大友氏の家臣となっていました
つか
たが、他の大名に仕えるため日田を去る者や武士をやめる者
もいました。そして、日田は秀吉の直轄地、太閤蔵入地とな
ちよっかつち たいこうくらいりち
り、翌年の1594（文禄3）年には秀吉の代官として派遣
ぶんろく はけん

された宮木長次郎豊盛が日隈（隈）城を亀翁山（亀山公園）上に築き、その城下町として隈町がつくられ、政治の拠点となりました。田島にあった町を城下に移して、隈町の基礎としたと伝わっています。

宮木氏の後に秀吉の家臣である毛利高政が日隈城の城主となり、宮木氏がつくった城に修理を加えて、天守閣を作ったといわれています。佐伯市の毛利文庫にはこの天守閣に保管されていたものを記録した古文書が残っており、それによると日隈城の天守は5層6階で、大分市の府内城の5層4階を超えるものであり、大分県最大級の天守であったことがわかります。石垣の中の下段には弓矢や大筒（大砲）、2段には金のよろいやかぶと、秀吉から与えられた朱印状の箱、3段には具足類、4段には刀類、5段には鳥毛、最上段にはルソン壺などの高級な茶器とともにちり取りやほうきがあったようです。



交通の要衝である日田を重要視した豊臣秀吉は、宮木長次郎豊盛に玖珠・日田両郡の支配を任せ、日隈山（亀山公園）に城を築かせたのが、日隈城です。のちに毛利高政の時に5層6階の天守などが築かれたといわれています。



代官支配から幕府領地へ

江戸時代の日本は、幕府領（公領、天領）と大名・旗本・寺社領（私領）に分かれていました。近世中期以降の日田市域は、多くの地域は、幕府領でしたが、大名の領地もありました。豊後森藩（久留嶋家）は有田地区に、3,800石余りの領地を持ち幕末まで大名領でした。日田は、大名の城と城下町であったこともあります。亀山公園には、日隈城があり、月隈公園には永山城がありました。

豊臣秀吉の時代に、宮木長次郎豊盛が日隈城を築城し、隈町を造りました。その後、毛利高政が玖珠の角牟礼城とともに日隈城・隈町を支配していました。関ヶ原の合戦後の1601（慶長6）年、毛利家は海部郡佐伯に移りましたが、幕府領となった日田・玖珠郡を代官として預っていました。

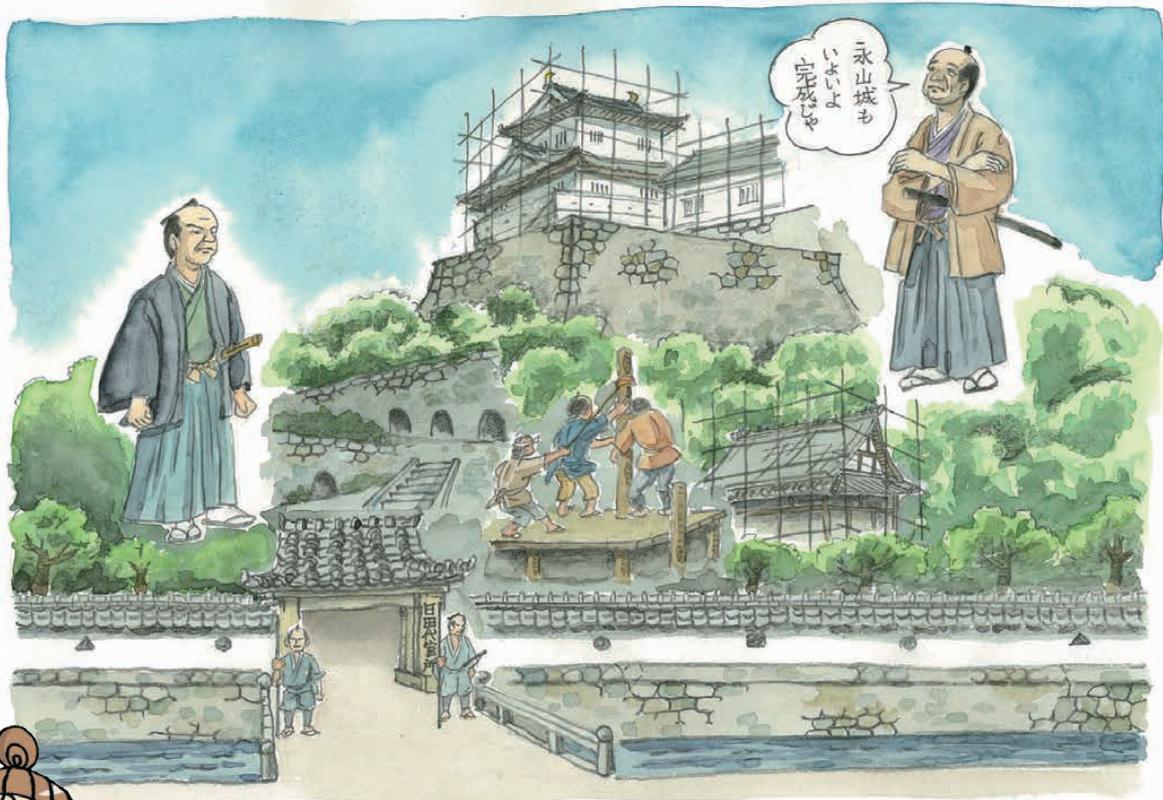
この年、月隈山に丸山城を築き、丸山町を城下として、小川光氏が2万石の大名として入りました。領地は、日田・玖珠・速見郡の内です。今も残る本丸の石垣や川原石を使用した搦め手の石垣は、このころ造られたと考えられます。日田市域は、北部の久留嶋家領、中西部の小川家領、南部・東部の毛利家預りの幕府領となりました。

1616（元和2）年 譜代大名の石川忠総が入り（日田・玖珠・速見郡で6万石）、城の名を永山城と改め、丸山町を拡大して豆田町としました。石川時代の1624（寛永元）年ごろ、大原八幡が求来里村の元宮から現在の地に移りました。石川家は1633（寛永10）年に下総（千葉県）に移り、幕末には伊勢亀山（三重県）にいました。石川家の家老を務めた加藤家などに、永山城や日田の絵図・記録が今も残

っています。

石川家の領地は、当時なかつ中津藩主ときつき杵築藩主であったおがさわら小笠原2家が預かり、さらに幕府から派遣されたはけん小川藤左衛門とおがわとうざえもん同九左衛門の二人が最初の代官を務め、その後ひごほそかわけ肥後細川家の預かり地を経て、代官支配となりました。この頃には、豊後のばくふりょうしはい幕府領支配は、ながやま日田永山とたかまつ大分郡高松（大分市）におかれた代官所が行いました。

1682（てんな天和2）年、日田永山にとくがわいえやす徳川家康の曾孫、そうそん松平まつだいら直矩が7万石の大名として入りました。永山城の改修や300人の家臣のかしん武家屋敷などが造られました。しかし、わずか5年ででわやまがた出羽山形（山形市）に移りました。以後、永山城はしろやま城山としてじょうしゅ城主が入ることなく、めいじいしん明治維新を迎えました。



1601（慶長6）年に完成した永山城（現在の月隈公園）は町人たちが暮らす豆田町の北側に建設されました。最初の殿様はおがわみつうじ小川光氏でしたが、その後いしかわただふさ石川忠総などが城主となります。1639（寛永16）年、日田は徳川幕府の支配地となり日田代官所がつくられました。

日田代官と日田御役所

江戸時代の代官は、将軍の代りに幕府領を支配する役人で、旗本はたもとがその職につき、役所を代官所（陣屋、御役所じんやおやくしよ）といます。

日田の代官所は永山城のふもとにあり、永山布政所ながやまふせいしよ、日田御役所ひたおんやくしよとも呼ばれました。1724（享保9）年代官となった増田太兵衛ますだたへい以降は、豊後はもちろん九州の豊前ぶぜん・筑前ちくぜん・肥後ひご・日向ひゅうがなどにあった幕府領（12～15万石余）支配きよてんの拠点でした。代官は、幕府領の治安ちあんの維持いじ、年貢ねんぐの徴収などのほか、藩領はんりょうの境界争いなどの調停ちやうていも行いました。日田の役所には代官以下15名位の役人が詰め、このほか、江戸よっかいち・四日市とみおか（宇佐市）・富岡とみたか（熊本県）・富高（宮崎県）にも出張所（陣屋）がありました（全員で30名位）。のちに幕府勘定奉行ばくふかんじやうぶぎやうとなる川路聖謨かわじとしあきらは役所詰め役人内藤吉兵衛つないとうきちべいの子でした。

延べ30人に及ぶ歴代の日田代官の内、岡田庄太夫おかだしやうだゆうの時まばるそうどうには、農民が年貢の高さを幕府に訴えた馬原騒動という百姓一揆ひやくしやういっきが1746（延享3）年におこりました。岡田は、「助合穀」という救済組織きやうさいを作りました。岡田家は子や孫も代官を務め、1767（明和4）年庄太夫の2男揖斐十太夫いびじゅうだゆうのとき、西国筋郡代さいごくすじぐんだいに昇格しょうかくしました。これは、関東みの・美濃につづく全国で3番目に設置された役職です。

1805（文化2）年、岡藩では、日田代官羽倉権九郎はくらごんくろうの息子陽三郎ようざぶろうに毎年米100俵を進上びやうしんじやうするとしています。その理由は、岡藩主中川久貴なかがわひさたかと親しかったとありますが、やはり権威ある日田代官との結びつきを重視したのでしょう。

1817（文化14）年、着任した塩谷大四郎は、
 1821（文政4）年に郡代に昇格しています。塩谷は19
 年の在職中に、小ヶ瀬井路の開鑿、隈川・中城川の改修と
 通船、日田 - 玖珠間の道路改修、周防灘沿岸の新田開発など
 の公共事業に廣瀬久兵衛、草野忠右衛門などを用いて推進し
 ました。その費用は、農民や商人という民間から出されまし
 た。また、災害などに備えて米を準備しておく陰徳蔵を、役
 所の東側の畑地に設け、盲人のための養育田も設置しまし
 た。これも民間の資金です。民衆に親孝行をすすめるための
 「孝行和讃」を配布し、孝経碑の建設なども実施しています。
 塩谷のこうした政策に対する、当時の人々の評価は善悪両方
 がありました。

動乱の時期に在職した最後の郡代窪田治部右衛門は、
 農兵隊（制勝組）を組織するなど幕府体制の維持を図りまし
 たが、1868（慶応4）年、正月に日田から肥後方面へ逃
 亡しました。そして、同年閏4月に日田県が設置されました。



九州の中では一番重要な役割を持った代官所が日田にありました。代官た
 ちの主な仕事は、年貢米とされる税金を集めることで、そのほか事件や事故
 の解決をおこなう裁判所のような仕事もしていました。

【コラム 豆田・隈の町並み】

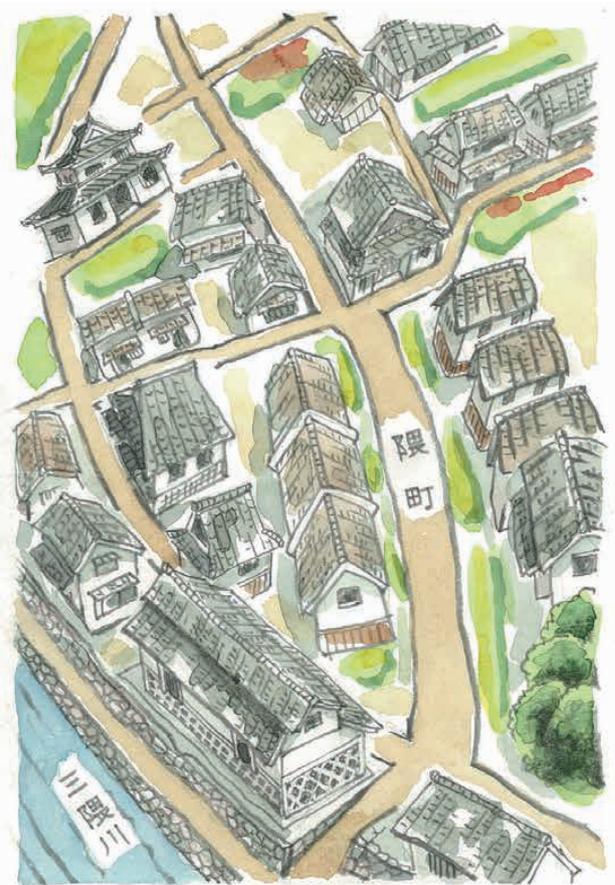
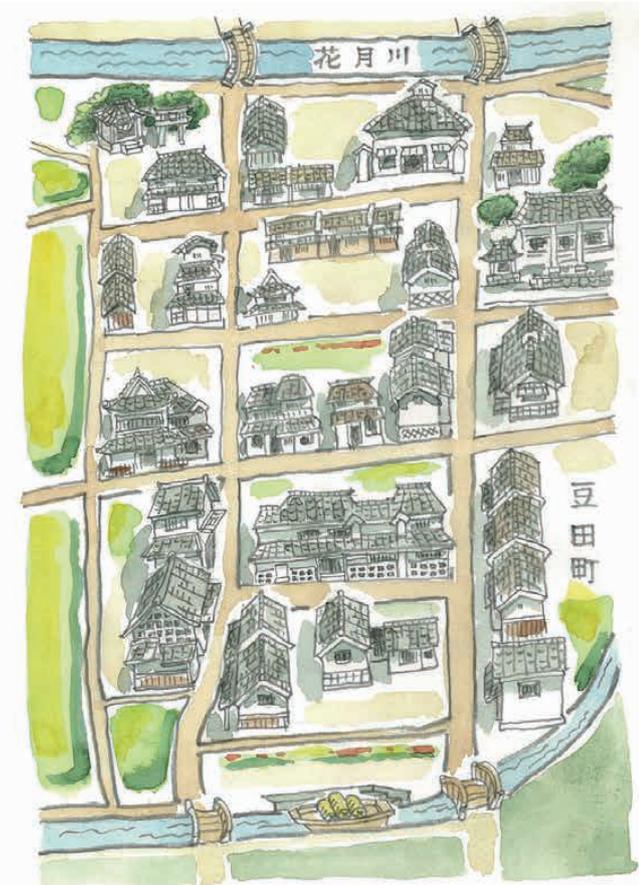
江戸時代における日田の歴史や文化を語る上で、^{かたる}豆田町と^{くままち}隈町の果たした役割は大きなものがありました。両町には大きな商家が軒を連ね、各地から人や物資が行き交うにぎやかな町が形成され、^{ちほらけ}千原家や^{ひろせけ}廣瀬家（^{まめだまち}豆田町）、^{もりけ}森家や^{やまだけ}山田家（^{くままち}隈町）などから俳人や詩人、画家など文化面で活躍する人も数多く誕生しています。

1593（^{ぶんろく}文禄2）年、^{ちよくせつしはいち}豊臣秀吉の直接支配地である「^{たいこうくらいりち}太閤蔵入地」の日田に代官^{みやきちょうじろう}宮木長次郎が^{はけん}派遣され、翌年に^{ひのくまじょう}日隈城が築かれます。そこで城下町の建設も必要となり、^{たしまむら}田島村の町場を移して形成されたのが隈町です。三隈川の^{うがん}右岸に築かれた町は、^{こうずい}洪水などの水害に加えて、火災も度々発生するなど災害に悩まされていたため、災害に強いまちづくりが常に行われてきました。町場全体は、三隈川とその東側の^{ほりかわ}堀川で囲まれていましたが、内部は^{すじ}筋（道）で^{くかく}区画され、各町には^{たなか}田中町・^{ごうのき}我有木町・^{かみよこ}上横町・^{なか}中町・^{しもよこ}下横町・^{こんや}紺屋町・^{ほりた}堀田町などの名前が付いています。隈町の中心となる^{こんや}紺屋町や^{たなか}田中町付近では、三隈川に面した場所に大きな屋敷地が設けられ、瓦屋根の商家が軒を連ねていました。また、町の南北には寺院が^{はいち}配置されたほか、東西南北の町の入口には^{かま}構え（門）がつくられ、^{きせい}通行人を規制できるようにもなっていました。現在では^{ほりかわ}堀川は埋められて車道となっています。

豆田町の歴史は、1601（^{けいちょう}慶長6）年に^{おがわみつうじ}小川光氏が^{かげつ}花月川北側の^{まるやまじょう}月隈山に^{のち}丸山城（後に^{ながやまじょう}永山城）を築いたことに始まります。その時、城下町の^{まるやまじょう}丸山町が^{せいび}整備され、後に^{ながやままち}永山町、

そして現在の^{まめだまち}豆田町へと名称や^{めいしゅう}範囲が^{はんい}変更されて^{へんこう}きました。
 町の中心には南北に走る道路が^の延びており、^{うわまち}上町と^{したまち}下町通
 りと呼んでいました。通りに^{めん}面して、上町は^{むろまち}室町・^{ひらのまち}平野町・
^{やはたまち}八幡町、下町では一丁目・二丁目・三丁目と呼び名され、上町・
 下町に^{はさ}挟まれた^{よこみちぞ}東西の横道沿いの町にも北側から^{かわばたちょう}川端町・
^{ふろやちょう}風呂屋町・^{あぶらやちょう}油屋町・^{すみよしちょう}住吉町・^{いおまち}魚町と^{すべ}全てに名前が付いていま
 した。豆田町は江戸時代に1回、明治時代に2回起きた大火
 事の経験から、火災に強い「^{いぐらづく}居蔵造り」の^{けんちく}建物を建築して
 いきます。火災の後に建築された同じ^{くいき}区域の建物を見ると、
 外観に同じデザインを持つ家があるのも町並みの^{まちな}特徴の一つ
 です。豆田町には、幕府の^{こうきん}公金を取り扱う^と掛屋や^{あつ}府内藩（大
^{おかはん}分市）、^{たけた}岡藩（竹田市）など九州諸藩の^{きゅうしゅうしよほん}御用達を^{ごようたし}務めた^{つと}商家
 が多く、代表的なものは^{ちはらけ}千原家や^{ひろせけ}廣瀬家、^{てしまけ}手嶋家、^{くさのけ}草野家な
 どで、^{やしきち}屋敷地には^{とう}10棟を超す^こ住居や^{てんぽ}店舗、^{くら}蔵などがありま
 した。

近世のひた



江戸時代の交通

日田は北部九州のほぼ中心にあり、古くから交通の要衝ようしゅうでした。日田から直線距離ちよくせんきょりで60km圏内けんないに福岡・北九州・佐賀・熊本・大分の各都市があります。江戸時代には九州の幕府領ばくふりょうを統治する代官所とうち だいかんしょが設置され、日田の代官所きてんを起点とする6つの陸上交通路りくじょうこうつうろが使われていました。

1	宇佐・中津方面	豊前国宇佐宮路 <small>なかつじょう いしがかいしたみ</small> 中津城路 石坂石畳道
2	彦山・小倉方面 <small>ひこさん こくら</small>	彦山路 <small>ひこさん</small> 小倉城路 <small>こくらじょう</small> 岳滅鬼神道 <small>かくめきしんどう</small>
3	筑前・福岡方面 <small>ちくぜん</small>	筑前国路 <small>ちくぜんのくに</small> 福岡城路 <small>ふくおかじょう</small> 小月橋 <small>おつきばし</small>
4	筑後・久留米方面 <small>ちくご</small>	筑後国高良山路 <small>ちくごくにこうらさん</small> 久留米城路 <small>くろめじょう</small> 加々鶴新道 <small>かがつる</small> 筏場目鏡橋 <small>いかだばめがねばし</small>
5	肥後阿蘇・熊本 <small>ひご あそ</small> 豊後竹田方面 <small>たけた</small>	肥後国阿蘇山路 <small>ひごのくにあそさん</small> 隈府道 <small>わいふ</small> 熊本城路 <small>くまもとじょう</small> 直入郡岡城路 <small>いしかだばめがねばし</small> 台神社の石畳 <small>たいじんじや いしたみ</small> 曾田の台 <small>そ た だい</small>
6	玖珠方面 <small>くすくもりえい</small>	玖珠郡森宮路 <small>かわばるすいどう</small> 川原隧道と石畳 <small>いしたみ</small>

九州の幕府領支配ばくふりょうしはいの中心であった日田には、九州諸国きゅうしゅうしよこくから多くの人たちが代官しょうかや商家おとずのもとを訪れ、お膝元ひざもとの町である豆田町まめだまちには宿泊先しゅくはくさきとなる旅籠はたごやお土産用みやげようとなる菓子店かしてんが多数ありました。今のように車や列車はありませんので、馬や駕籠かごに乗るか、歩いて移動して行きました。山に囲まれて川や谷が多い日田に出入りするためには数々の難所があり、日田の掛屋かけやと呼ばれる商人や地域の農民たちが力を合わせて、石畳道ずいどうや隧道（トンネル）、石橋が造られました。

今のように機械はありませんので、全て手作業です。人手と時間をかけて苦勞して造られ、そのいくつかは今も見ることができます。これらの道や橋を利用して、多くの人々や品物が行き来して行きました。

また、江戸時代も半ばになると、川船かわぶねで人やものを運ぶ「

つうせん

通船」もはじまりました。

年貢米にも1733（享保18

）年に長崎を經由する通船の利

用が始まり、1738（元文3

）年からは夜明の関河岸に集め

られ、船で筑後川下流地域へ運

ばれました。幕府領である日

田の年貢米は、大坂や江戸へ

運ばれました。それまでは、中

津まで陸路で牛馬の背に乗せて

運んでいましたが、舟運により

たくさん量を一度に運ぶこと

ができるようになりました。そ

の後、小ヶ瀬井路が完成して、

城内川の水量が増えたため、豆田町からも荷物の積み出しが可能

となり、豆田町の中城河岸、隈町の竹田河岸には、年貢米をはじ

めとして多くの品物が流通するようになりました。港町という地

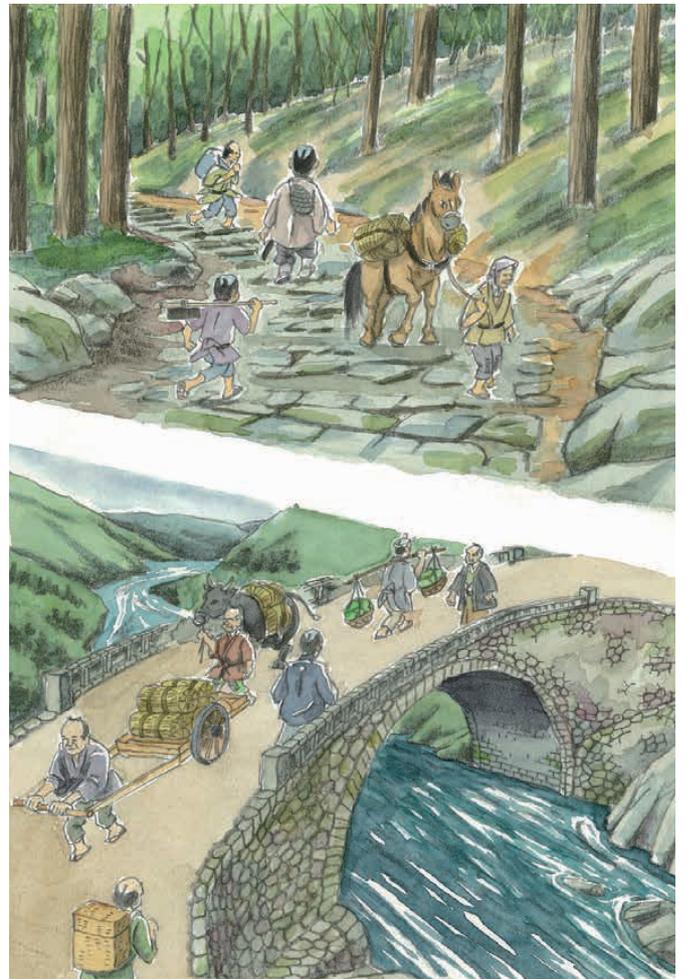
名は中城河岸があった名残りです。年貢や作物の運送に加え、中

国から長崎に到来した文物は、一度日田を經由して、大阪や江戸

へ運ばれていきました。有名な詩人や画家たちも全国から日田を

訪れるなど、文化面でも大いに交流が進み、交通網の整備によっ

て豊かな日田の町人文化が育まれたのです。



日田は九州の真ん中で、年貢米や品物を運ぶ道がいくつもあり、博多や豊後府内（大分）、熊本、小倉などと通じていましたが、流れの急な川や険しい登り坂がある山には、筏場目鏡橋などの石橋や石畳道が造られました。

日田商人の活躍

近世初期に日田に永山城と日隈城が築かれ、城下町となり、豆田・隈の両町には、多くの商人が集まり定着し、活発な商業活動が行われるようになりました。

最初は周辺地域との農産物の取引から始まり、やがて北部九州地域や上方（京都・大坂地方）や瀬戸内地域との仲介商業を手掛けるようになりました。こうした資本を基として、金融貸付業（お金を貸す商売）を行うようになりました。日田が幕府の直轄地「天領」であったため、有力商人は九州各藩の御用を勤める「御用達」になることによって、幕府の公金を取り扱う「掛屋」に任ぜられたりして、活発な経済活動を行いました。商人たちは、その資金を九州一円の大名などにも貸付け、大きな利潤を得て、ますます財力を蓄えました。この当時、日田の金融資本は、いわば九州諸大名の銀行の役割をして「日田金」と呼ばれ、日田は九州の金融経済の中心地となっていたのです。

日田の有力商人には、豆田町に丸屋（千原家）・博多屋（廣瀬家）・伊予屋（手嶋家）・升屋（草野家）・俵屋（合原家）などがあり、隈町には京屋（山田家）・鍋屋（森家）などがあり、金融業のほか、それぞれ製蠟業、油製造・醤油・酒などの醸造業を広く営んでいました。草野家や廣瀬家などは、豆田町の古い町並みの中に、今も古い住宅が残っています。

日田商人は商業活動で活躍するばかりでなく、その財力で日田地域の道路・橋・水路整備などの大規模な公共事業を行って郷土日田の発展に寄与しました。中でも、博多屋（廣

瀬家)の廣瀬久兵衛らによって開かれた小ヶ瀬井路と日田川通
 船、京屋(山田家)の山田常良が改修した石坂石畳道は有名
 です。小ヶ瀬井路は、上流の玖珠川の水を盆地内部の田島・
 友田などに引くために会所山にトンネルを掘り抜くなどの
 難工事でしたが、廣瀬久兵衛や草野忠右衛門らの努力によっ
 て2年をかけて完成し、15kmの長さの井路で13か村の
 500haの田畑が潤うことになり、この後は干ばつに悩む
 こともなくなり農民たちに感謝されました。

日田商人たちは、手に入れた利益を自分たちのために使う
 だけでなく、広く地域社会のためにも投じる姿勢をもって
 いました。



「天領」であった日田には、幕府の公金を扱ったり九州各藩の「御用達」
 を勤める商人がいて、活発な経済活動を行い大きな財力を蓄えましたが、
 その財力で日田の道路・橋・水路整備などの多くの大規模な公共事業も行
 いました。

農民の暮らし

1647（正保^{しょうほう}4）年に作られた村々の名前とその生産力（米の石高・取れる量）を記録した「正保郷帳」によると日田郡の村数は104、石高は2万9,000石とあります。後の元禄・天保に作られた記録と多少の変動はあるものの、幕末までほぼ同じくらいでした。なお、現在の日田市には森藩領の有田地域も含まれています。

村々の支配は、地域の庄屋・組頭・百姓代などの地方役人によって取りまとめられていました。キリシタンを取り締まるため、それぞれの地域のお寺の檀家となり、今の戸籍のように村人たちの情報が記録されていました。江戸時代は税金（年貢）として米を納めていました。日田はほとんどが幕府領でしたので、藩の大名ではなく、徳川幕府に直接年貢米を納めました。はじめは取れる量に応じて割合が決められていましたが、江戸時代の半ばから、豊作・不作に関わらず一定の量が徴収されるようになりました。

当時の米作りはほとんどが手作業で行われていました。農民は種籾の保管から収穫・脱穀まで一年中つきっきりで世話をする必要がありました。農機具には、田を耕すために牛馬に引かせた「犁」、稲穂から籾を取り出す「千歯こき」や籾殻や藁屑を風によって選別する「唐箕」などがあります。一年の米作りの様子は前津江町にある「四季農耕図絵馬」からも見て取ることができます。

農村ではしばしば自然災害による飢饉や伝染病が流行し、厳しい生活を送っていました。日田では代官の命令で「陰徳蔵」と呼ばれる倉庫に、飢饉や災害などで食べるものがな

くこくもつなったときのための穀物が
準備じゅんびされていました。

日田出身おおくらながつねの大蔵永常は、若
い頃だいきぎんの大飢饉をきっかけに、
九州諸国きゅうしゅうしょこくを転々とし、農民に
役立つ作物さいばいの栽培・加工方法



などを学びました。後に大坂に渡り、農民にも分かりやすい栽
培方法しるが記された農業書かんこうを数多く刊行しました。さらに田原藩たはらはん
(愛知県)はままつはんや浜松藩のうぎょうしどうしゃ(静岡県)に農業指導者として招かれました。
晩年ばんねんには江戸しゅうたいせいにおり、集大成ともいえる『広益国産考』こうえきこくさんこうを著し、
全国あらわの農村で農業技術こうじょうの向上に役立てられ、日本三大農学者の1
人に数えられています。

このように、農村では米以外のお金になる作物も作られ、出荷
されていました。日田では紙こうぞの原料となる楮こうぞやろうそくの原料と
なる櫛はせが特産品でした。また、江戸時代の半ば頃からは、杉なかの植
林も始まり、後に産業として成長していきます。

一方で農村では生活を少しでもよくするため、地域の神社の祭
りや寺の行事いせじんぐうに参加したり、伊勢神宮さんばいを参拝する「伊勢参り」な
ども行われていました。雨乞あまごいや豊作祈願ほうさくきがん、無病息災むびょうそくさいなど神仏しんぶつに
日々の暮らしひびの安全を祈りました。今でも各地域の神社などで古
くから伝わる祭りが行われています。秋の祭日に行われる「楽」
では、天瀬町五馬地区いつまちくのくにち楽がく、前津江町の大野楽おおのがくや三ノ宮町
の磐戸楽いわとがくなど、杖つえを使ったものや河童かっぱに扮したものが伝わって
います。



日田の中でも寒冷地であった津江地区の年貢は、お米ではなく、銀（貨幣）で納められていました。

豆田の町人文化

江戸時代の日田は、幕府の直轄地として代官所が設けられたことから、九州をはじめとして全国から多くの人や物資が行き来する土地でありました。そのため、江戸や京都、大坂などで栄えた新しい文化が、人と共に入り、豊かな町人（商人）の間ではやるようになります。

江戸時代の前半は、主に俳諧（俳句など）がはやりますが、後半になると漢詩を作る詩会が各家で開かれました。また、客人を招いての書画や茶道、華道などを楽しみとする町人文化が発展し、日田祇園などの祭礼行事もこのような町人文化の一つで現在も続いています。

これらの中心となったのは、多くの商人らが生活する豆田町と隈町でした。豆田町では、千原家・廣瀬家・手嶋家・草野家^{のけ}がその代表的な商家であり、町年寄を務めた三松家や中村家も町人文化の発展に大きく関わっていました。また、隈町では森家や山田家を始め、後に林業で財を築いた後藤家などが知られています。

俳諧では、九州俳諧の中心人物でもあった中村西国（豆田町）や坂本朱拙（城町）、長野野紅、りん（吹上町）が有名ですが、また、廣瀬淡窓の父・桃秋や伯父の月化も俳諧文化を発展させました。その後は、廣瀬淡窓を中心に豆田町や隈町などで定期的な詩会が開催されるようになり、俳諧に代わって漢詩がはやりました。咸宜園の門下生たちも参加するなどして日田の人たちに漢詩を作る楽しさが広がっていきました。そのほか、隈町では特に書画会が盛んで、森春樹や

ごとうほうだい ちよめい がじん せんねんじじゅうしよく ひらのごがく
 後藤方大など著名な画人が生まれ、専念寺住職の平野五岳は
 し しよ が すぐ さんぜつそう
 「詩・書・画」の全てにおいて優れていましたので「三絶僧」
 と呼ばれました。そのほか、茶会は廣瀬家や草野家、後藤家
 ごとうけ
 などで盛んに行われたことが、建物や残されている茶道具、
 ちゃどうぐ
 古文書などで知られています。



近世のひた



江戸時代、豆田町や隈町に住んでいた商人や職人のことを町人ちょうにんと言いました。
 ゆうふく 裕福な町人は自宅で友人たちを招き、茶会や書画会を開いたほか、祇園祭では
 ごうか やまほこ かつやく
 豪華な山鉾をつくったりして活躍しました。

日田祇園と鶺鴒

日田の夏を代表する祭り「日田祇園」は、疫病・災厄を除くことを祈る八坂神社のお祭りです。

八坂神社の祭神は、八岐大蛇の退治の話で有名な素戔鳴尊です。その荒々しい神を鎮めるための祭りが祇園祭で、京都の八坂神社（祇園社）を始め全国で行われています。祭りのやり方はその地方で大きく異なっています。

日田祇園の特徴は、数メートルの高さの「山鉦」を曳き廻すもので、江戸時代の中ごろ1714（正徳4）年から始まったとされています。祭りは次第に盛んになり、当時は十数メートルを越える山鉦もあったと記録されています。「山鉦」は人形浄瑠璃や歌舞伎の題材から取って作られた人形や館、そして豪華絢爛な刺繍を施した垂幕「見送り」などを美しく飾りつけた「飾り山」で、これに車輪をつけて曳き廻すのが特徴です。現在、豆田・隈・竹田などで計9基が巡行しています。山鉦の台で演奏される祇園囃子は、1817年頃（文化末年）に代官に従って来た目明・小山徳太郎によって創められたといわれています。平成8年には、「日田祇園の曳山行事」が国の重要無形民俗文化財に指定、平成28年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

日田の夏の風物詩である三隈川の「鶺鴒」は、鶺鴒匠が6～8羽の鶺鴒を操って魚を獲る伝統的な漁法です。

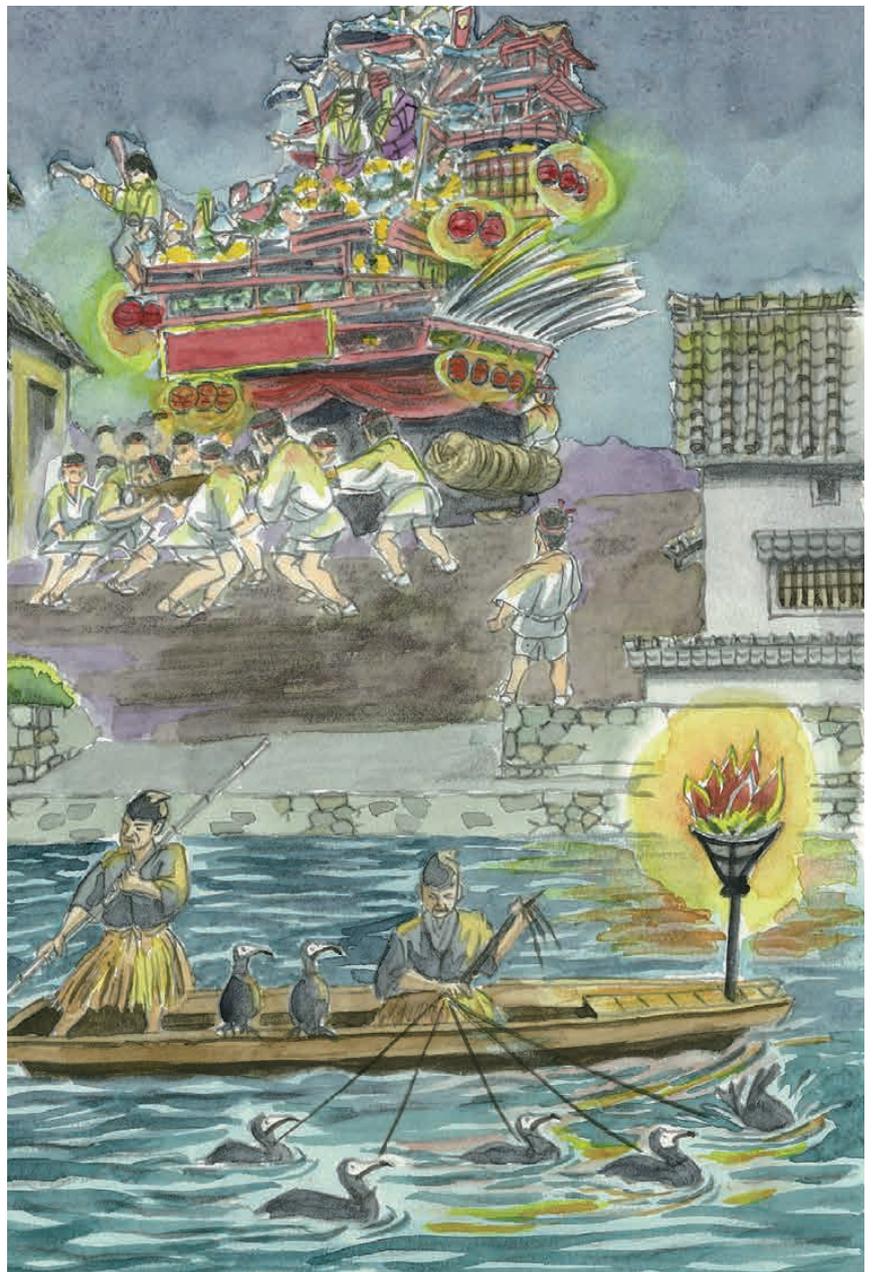
日田の鶺鴒は、1594（文禄3）年、日隈城を築城した豊臣秀吉の代官・宮木長次郎豊盛が、岐阜・長良川から鶺鴒匠4名を招いてきて始まったと伝えられています。江戸時代に

は歴代れきだいの日田代官が鶺鴒うしろうかぶを保護し、鶺鴒匠株とっけんてき（特権的な漁業権ぎょぎょうけん）をもつ四家よんけ以外には鶺鴒を禁じましたし、また、鶺鴒匠株を他人に売るか貸す場合には代官の許可を必要としました。

現在は、三隈川の上流にダム、下流には可動堰かどうせきが設けられたため、稚鮎ちあゆを放流ほうりゅうし、夜の観光鶺鴒かんこうかいとして行われています。毎年5月下旬から10月末まで、旅館の遊船りょかん（屋形船ゆうせん）に乗った人々に見せるために、篝火かがりびを焚いた小舟たでその周囲を回こぶねって伝統的な漁法ひろうを披露しています。1966（昭和41）年に「鶺鴒」はうかい大分県無形民俗文化財おおいたけんむけいみんぞくぶんかさいに指定されました。

「日田祇園」は、疫病えきびょうを除くことを祈る八坂神社のお祭りです。江戸時代の中ごろ1714（正徳4）年から始まったとされ、当時は十数メートルを越える山鉾もありました。

三隈川の「鶺鴒」は、鶺鴒匠が6～8羽の鶺鴒を操って魚を獲る漁法です。1594（文禄3）年、豊臣秀吉みやまきちやうじろウの代官・宮木長次郎とよもりが、岐阜から鶺鴒匠を招いてきて始まったとされています。



廣瀬淡窓と私塾咸宜園

私塾「咸宜園」は、廣瀬淡窓が1817（文化14）年に堀田村（現、淡窓2丁目）に開いた私塾です。

廣瀬淡窓は豆田町の商家・博多屋の長男に生まれましたが、病弱だったため弟の久兵衛に家業を譲り、24歳のときに豆田町で塾を開きました。

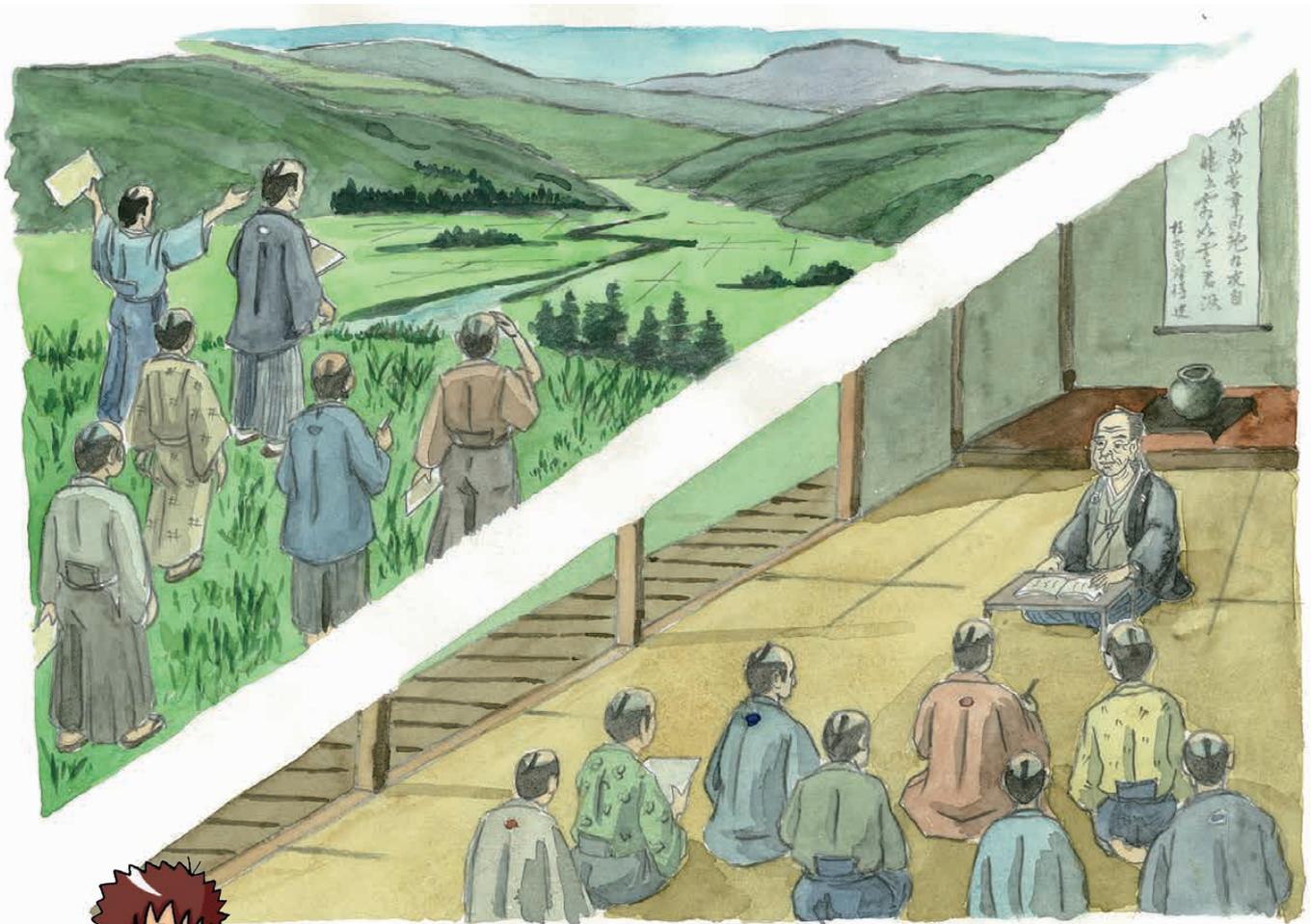
淡窓は幼少のころから学問に励み10歳の時には漢詩を学び、16歳のときに福岡の亀井南冥・昭陽の亀井塾に入塾して学びましたが、18歳の年末に大病に罹ってやむなく退塾しました。実家に帰って養生し、日田で塾を開くこととなったのです。24歳で豆田町の長福寺の学寮を借りて開塾した時は、門人はわずか2名で淡窓と一緒に自炊しながら学ぶ生活を始めたのでした。その後、門人も増え、実家の土蔵に移ったり、借家を借り「成章舎」と名づけていましたが、次第に門人が増えたため、26歳のときには豆田裏町に新たに塾舎を建て「桂林園」と名づけました。入門者も次第に九州各地から集まるようになり、10年後の、36歳のときに堀田村に塾舎を移転し「咸宜園」としました。

「咸宜園」には全国からの塾生が集り、それに従って建物も増え、71歳のときに在塾者233名の最高を記録していますが、常に100人前後が学ぶ江戸時代では全国最大規模の私塾となりました。「咸宜園」は淡窓没後も、子孫や門人によって受け継がれて、明治30年まで約80年間存続し、門下生数は全国66カ国から集っており約5,000人に及ぶといわれています。

「咸宜園」の教育では、「三奪法」（入門時に学歴・年齢・

身分を問わない) による平等主義、^{びょうどうしゆぎ}「月旦評」^{げったんひょう}(毎月、成績を評価して発表するもの。無級から九級までの等級があった) による^{じつりよくしゆぎ}実力主義などの独自の教育^{どくじ}が行われました。また、塾では、淡窓は有名な漢詩人^{かんしじん}でもあったため作詩^{さくし}を奨めるなど情操教育^{じょうそうきょういく}も行っており、塾生^{きんこう}と近郊^{きんこう}に出かけて吟行することもありました。

門下生には、兵学者^{へいがくしゃ}の大村益次郎^{おおむらますじろう}、蘭学者^{らんがくしゃ}の高野長英^{たかのちやうえい}、写真家^{うえのひこま}の上野彦馬^{しがそう}、詩画僧^{ひらのごがく}の平野五岳^{もんぶたいじやう}、文部大丞^{ちやうさんしゆう}の長三洲、東京府知事^{まつだみちゆき}の松田道之^{ないかくそうりだいじん}、内閣総理大臣^{きやうらけいご}になった清浦奎吾^{だいしんいんちやう}、大審院長^{よこたくにおみ}になった横田國臣^{さまざま}など、様々な分野^{ぶんや}で活躍^{かつやく}した人材が数多く出ています。



近世のひた



^{しじゆく}私塾^{かんぎえん}「咸宜園」は、^{ひろせたんそう}廣瀬淡窓が年1817(文化14)年に堀田村(現、^{ぶんか}淡窓2丁目)に開いた私塾^{ほりたむら}です。塾では「三奪法」や「月旦評」による独自の教育が行われ、全国66カ国から約5千人もの塾生を集め、当時、全国最大規模の私塾でした。塾では、漢詩の作詩を奨め、塾生と近郊に出かけて作詩することもありました。

咸宜園は、2015(平成27)年に日本で最初の「日本遺産」に認定されました。

日田林業の芽生え

日田市には^{おおやまちく}大山地区や^{つえちく}津江地区などを中心に豊かな森林が広がり、福岡県や熊本県と接する^{さんちょうふきん}山頂付近にはブナやミズナラ、シオジなどの^{げんせいりん}原生林が残っています。それらの山の高さは1,000mに^{たっ}達しているものもあります。

このように緑豊かな日田の山々は、江戸時代、^{ばくふ}幕府のために必要な「御用林」として^{ごようりん}徳川幕府に^{とくがわばくふ}指定されていたこともありました。

現在、市全体の土地面積における森林が^し占める^{わりあい}割合は、約83%と非常に高く、市民にとっても森林を^{かん}身近に感じる^{きょう}環境が日田にはあります。

日田林業の中心はスギやヒノキですが、このような産業はいつ頃から始まったのでしょうか。

^{さがらきちさぶろう}相良吉三郎が^{きらく}記録した^{こもんじょ}古文書には、今から300年以上前の日田の林業のことが書かれています。

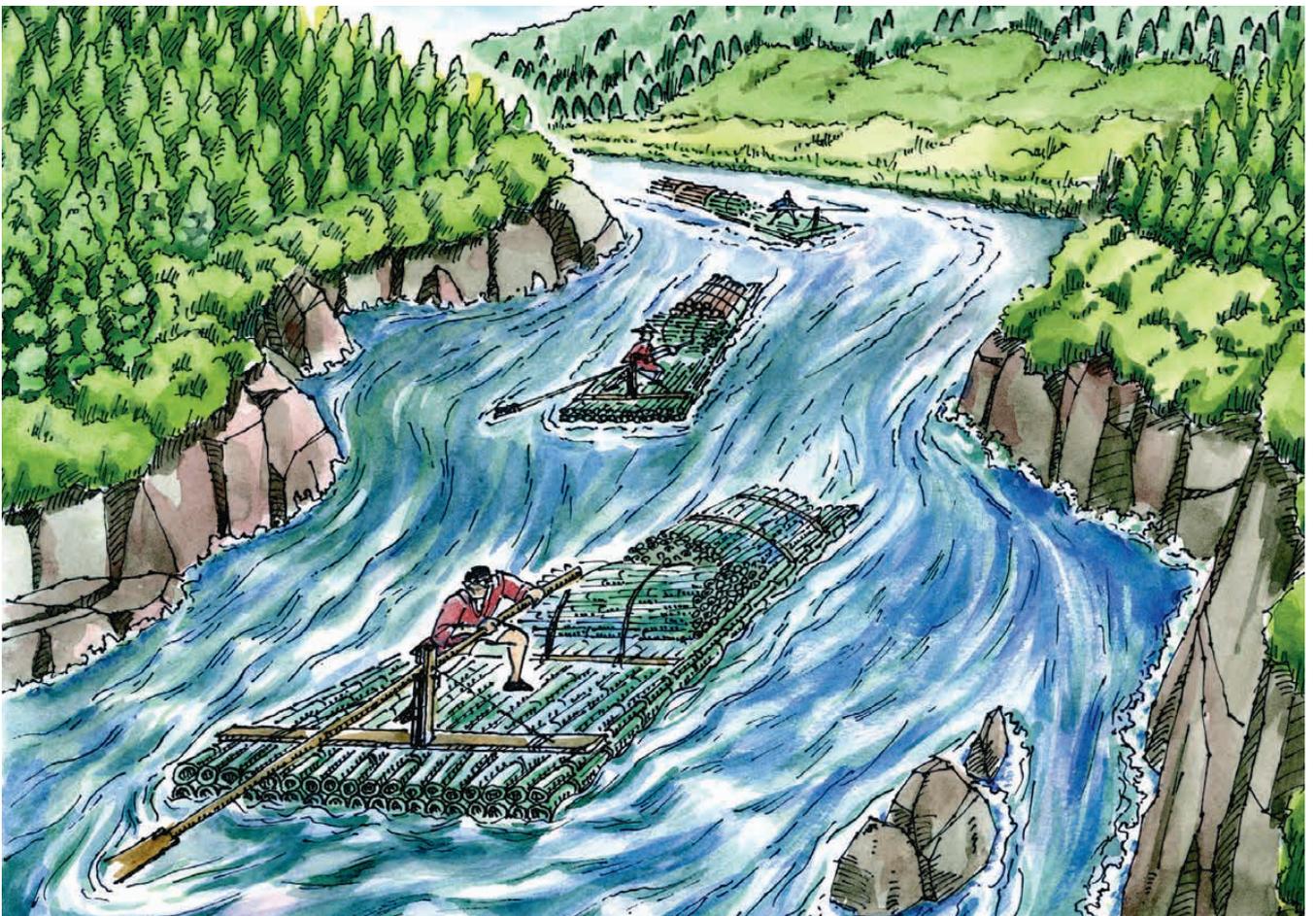
吉三郎は「^{ちくぼくたびだししょうばい}竹木旅出商売」といって、^{いかに}竹を^{いかに}筏に組んで^{ちくごがわ}筑後川（市内では^{みくまがわ}三隈川）を西に下り、川下の地域で材木や竹を売っていました。このような材木を扱う商売は、日田では吉三郎が最初に行ったようですが、商品はほとんどが竹で、木材は少なく、スギはまったくなかったと記録されています。

また、吉三郎の孫の代には、^{えどばくふ}江戸幕府により^{ほぜん}山林の^{ほぜん}保全や^さスギの^{すす}挿し木を^{しよくりん}勧めるなど^{しよくりん}植林に関する活動も盛んになってきました。

また、今から280年ほど前の^{こもんじょ}古文書には、^{ひゅうがのくに}日向国（宮崎県）の^{なすやま}奈須山で^{ばっさい}木材を^{ばっさい}伐採する大きな作業があり、そこに日

田郡入江村（北友田）の兄弟3人が仕事を求めて作業に加わったとあります。そこで、兄弟たちはスギ苗の植え付け方法や山林道具などについて学んだ後、日田に帰ってきました。その後、日田の山林にスギが植林されるようになったといわれています。

大蔵永常の「広益国産考」では、日田郡全体で林木の売上げが銀250貫目、竹が10貫目あったと記されています。



日田の林業を大きく前進させた人物に相良吉三郎という人がいました。吉三郎は竹を筏に組んで三隈川（筑後川）を下り、川下で竹や木材をあつかう商売を日田で最初にしたとされています。

日田の明治維新

江戸時代は、戦のない時代が約260年余り続いた平和な社会でした。徳川将軍家は江戸幕府（徳川幕府とも）によって政治を行い、全国各地を280余りの藩に分けて殿様や武士に治めさせました。

そのほか、全国には幕府が直接治めていた場所がありましたが、日田郡はその一つでした。現在の丸山町には、日田代官所が設置され、そこで働く代官や役人たちは豆田町・隈町の商家や各村の庄屋たちの協力を得て、日田のまちづくりを行っていました。日田には、九州各地から人や物資が集まるにぎやかな地域として発展し、豊かな経済力を持った町人たちが江戸や京都、上方（大坂）^{かみがた}から新しい文化を取り入れ、町は活気づいていました。

そんな中、世界では大きな産業革命が興り、ヨーロッパやアメリカの工業や技術に遅れをとるようになり、日本は西洋文化を見習って近代化を目指すことになりました。そのため、国内は大きく二つの動きに分かれます。ひとつは、江戸幕府を守り維持しようとする動きで、もう一つは新しい時代を望む人々でした。

1867（慶応3）年10月、幕府の第15代将軍徳川慶喜^{とくがわよしのぶ}は政治の実権を朝廷に返しました（大政奉還^{たいせいほうかん}）。

そこで、新しい政府は天皇を中心とした政治を進めるため、各地を治めていた藩の仕組みを解体します。また、日田のように幕府が直接治めていた地域は、一度新政府の元に返され、日田は日田県として再出発しました。これまでの代官の代わりに知事が派遣されました。最初の知事は鹿児島県出

身まつかたまさよしの松方正義でした。後に大蔵大臣や内閣総理大臣として活躍した人物です。日田では、町人たちの協力を得て身寄りのない乳幼児を保護する「養育館」よういくかん（三本松駐車場付近）や「生産会所」の建設を行ったことでも知られています。



1868（慶応4・明治元）年、これまで260年も続いた徳川幕府とくがわよしのぶが終わりとなり、江戸城には徳川慶喜に代わって天皇が入城しました。「江戸」は「東京」と名前を変え、「日田郡」も新しく「日田県」となり、これまで「日田代官所」だった場所が「日田県役所」となりました。

【コラム 筑後軌道】

現在の日田にはJR久大本線、日田彦山線が通っていますが、これらが開通する以前、日田には日田と久留米の間を行き来する別の鉄道が走っていました。

この鉄道を「筑後軌道」といい、当初は1903（明治36）年に福岡県浮羽郡吉井町に「馬鉄会社」として吉井と田主丸の間を馬車で1日13往復していたといわれています。その後、運搬方法を馬から石油発動機、蒸気機関車に代えて、路線を延長していきながら、1916（大正5）年にはついに日田－久留米間で運行が開始されるようになりました。

当時の記録を見ると日田－久留米間の所要時間は約3時間で、運賃は76銭です。現在のお金に換算すると約2,500円前後です。今の運賃と比較してもかなり高かったといえます。しかし、この筑後軌道の開通は、「人の行き来は勿論、物資の運搬や文化の流入などにも大きな影響を与えた」と大正時代の案内書には書かれています。現在のように交通手段が多くない時代に、日田の人々に喜ばれていたことが分かります。1916（大正5）年に全線開通した筑後軌道は、久留米を始発として終点の日田豆田町までの全線距離は約44km、駅数は25駅あり、一日の列車本数は26本でした。その内、日田市内での線路の長さは約10kmで全体の4分の1を占め、駅数も石井町の長溪駅、発電所前、石井駅、隈駅、豆田駅と5ヶ所もありました。また、駅の他に、乗降する場所として三本松、日ノ隈、徳瀬、白手橋、川下、加々鶴の6ヶ所がありました。しかし、停留所や乗降場以外で飛

び乗ったり、降りたりする人もいたようです。

筑後軌道は、今でも日田市内のいくつかの場所で、その名残なごりを見ることができます。現在国道210号線の一部として使用されている加ヶ鶴トンネルもその一つです。

こうして、日田の交通に大きな影響を与えた筑後軌道ですが、1928（昭和3）年に久大本線かくちようが拡張はいせんされる中で廃線になり、吉井－日田間でバスを運行するようになります。しかし、1934（昭和9）年に久大本線が全線開通したことにより、このバスも国鉄（現在のJR）に買収されて、姿を消していきました。

筑後軌道が久留米－日田間をつないだ期間は15年という短い間でしたが、当時の人たちにとっては忘れられない大きな影響を与えた交通手段であったのではないのでしょうか。



豆田駅は終点なので久留米から来た機関車を久留米の方に反転させる「転車台てんしゃだい」という装置そうちがあり、平成23年度にそれがあったと言われる地を調査した結果、転車台の跡が良好な状態で残っていることが分かりました。

戦時下の日田

大変悲しいことですが、現在でも、世界のどこかでは、国同士が争う「戦争」が行われています。過去には日本も他の国々と戦争を行ったことがあります。

昭和の時代、1931年（昭和6）年には満州（現在の中国東北地方）にいた日本軍が中国軍を攻撃し、「満州事変」が起こりました。その後、1940（昭和15）年には、東南アジアの石油資源を得るために日本は軍隊を進めました。

日本が諸外国（アメリカ・イギリス・オランダ・中国など）と行った戦争で、主にアジアや太平洋地域で行われたため、「太平洋戦争」と呼ばれています。

1941（昭和16）年、日本軍はハワイにあるアメリカの軍港（真珠湾）を最初に攻撃しましたが、その後、多くの国が参加した連合軍に日本は敗れました。日本各地がアメリカ軍の飛行機から攻撃され、多くの町や村が破壊されました。当時、九州地方には北九州の八幡製鉄所や長崎の造船所など大規模な工場があったため、攻撃の標的となっていたのです。

この頃、日田の^{きみさこまち}君迫町には日本陸軍の兵器工場がつくられました。全国各地から多くの人々が働きに来ていましたが、当時の人口は現在の日田市よりも1万4千人ほど多く、8万人だったとされています。戦争になると食べ物が不足しました。市内では、お米の代わりに、いも飯や大根飯などを食べていたとも言われています。また、小学校の低学年は近くの神社や寺の建物で勉強をしていました。

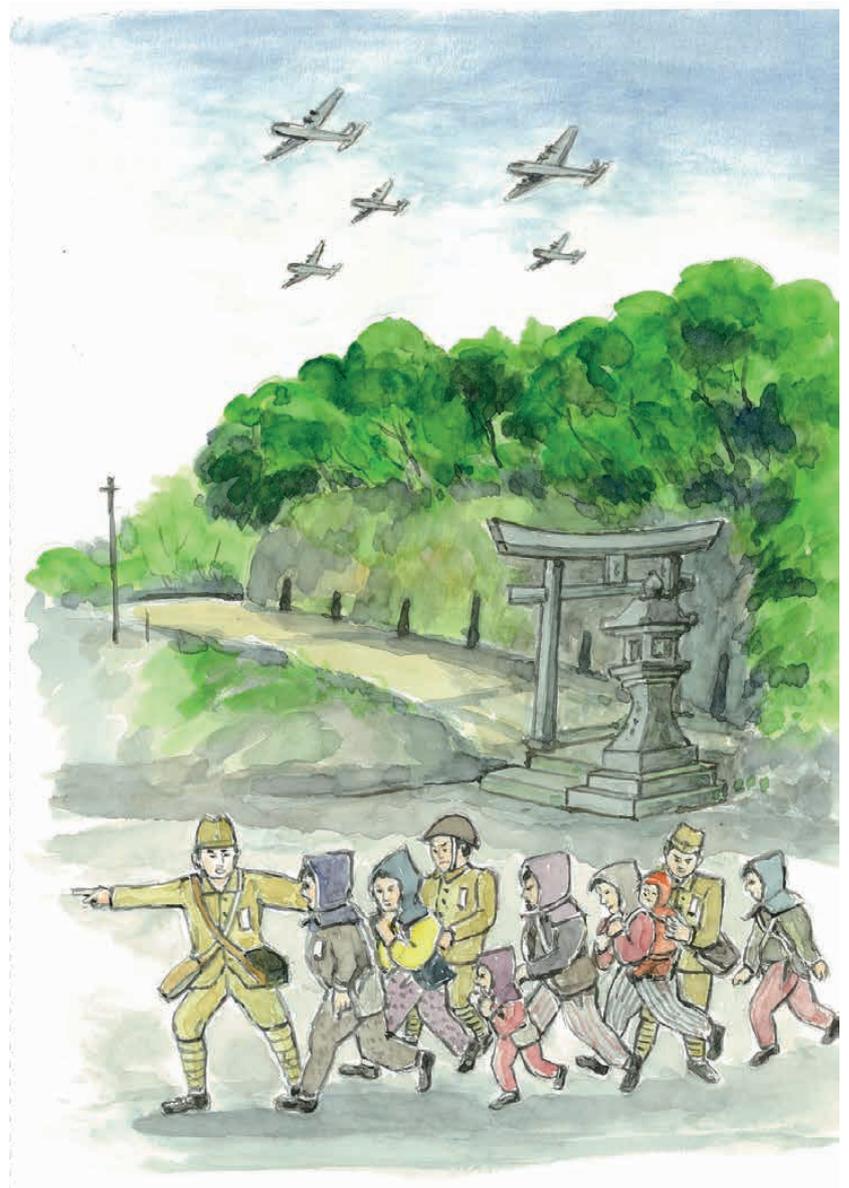
戦争中は、町の上空をアメリカ軍の飛行機が飛ぶと、市

内中にサイレンが鳴って危険を知らせました。このような時は、子どもは頭の上に防空頭巾ずきんをかぶり、自宅から近い防空壕ぼうくうごうに避難しました。現在も当時、使用された防空壕を月隈公園（丸山2丁目）や吹上観音付近（吹上町）などで、見ることができます。

この戦争は1945（昭和20）年に終わりましたが、その直前には広島・長崎に原子爆弾が投下され、多くの人々が犠牲となりました。

現在も市内で暮らすおじいさんやおばあさんたちから太平洋戦争を体験した話を聞くことができます。戦争が生んだ苦しみや悲しみについて話を聞くことで、二度と戦争を繰り返してはいけないという強い思いが生まれてきます。

1941（昭和16）年、日本はハワイのアメリカ基地を攻撃し、太平洋戦争が始まりました。日田の空にも爆撃機が飛びましたが、幸いにも空襲を受けることはありませんでした。月隈山の中には現在も多くの防空壕ぼうくうごうが残っています。



日田の大水害

山間部にある日田の地形は、6・7月頃から秋にかけての雨量が多い時期には、傾斜けいしゃの急な周囲の山々からの流れが一挙に三隈川に流れ込むため、集中豪雨や長雨が續くと、たびたび洪水が起こっています。1889（明治22）年と1921（大正10）年にも大洪水に見舞われていますが、1953（昭和28）年には空前くうぜんの大水害が発生しました。

昭和28年6月25日～29日に、日田地方もうれつに猛烈な激しい大雨が降り、三隈川はんらんが氾濫して多くの橋が流され、残った鉄筋造りの三隈大橋きょうきやくの橋脚には上流から流れてきた材木などが引かっ掛かって川の流せれを塞せき止めたために、激流げきりゅうが市街地しがいちに流れ込み、市街地の9割以上が浸水しんすいしました。日田市全体の被害は、死者17名・行方不明2名・流出家屋りゅうしゅつかおく571軒・全壊家屋ぜんかい かおく289軒・床上浸水家屋ゆかうえしんすいかおく2,764軒・床下浸水家屋ゆかしたしんすいかおく3,843軒・橋梁きょうりょうの流出りゅうしゅつ326ヶ所・道路どろの決壊けっかい1,101ヶ所など莫大ばくだいな被害を残しました。もっとも被害の大きかったのは、小湊町こぶちまち、若宮町わかみやまち、川原町かわはらまちの一带でした。小湊町・川原町の商店街には流出した家の木材などがうどず高く山を築き、目抜き通りの道路には土砂どしゃの山が續くなど悲惨ひさんな状況であったと当時の新聞に報じられています。

この大水害の後、三隈川の川幅はばを広げるなどの大規模な改修が行われました。上流おおやまがわの大山川に洪水を防ぐための松原まつばらダムと下笠しもがさダムが造られて、水害の危険を防ぎ市民の安全が図られることとなりました。なお、三隈川の水害では竹田公園たけだの川沿いにある大きなムクの樹きに、1889（明治22）年の大洪水では63名、1921（大正10）年の大洪水では

30名の人がこの樹に登って命が助かったので「人助けのムクれいぼくの樹」の霊木として今も毎年おまつりが行われています。

また、2012（平成24）年7月には、二度にわたる豪雨（平成24年7月九州北部豪雨）に見舞われ、花月川を中心にした河川・道路・農地・林道の崩壊ほうかいなどにより日田市全域にわたって大きな被害が発生しました。

さらに、2017（平成29）年7月5～6日にはまたも豪雨（平成29年7月九州北部豪雨）に見舞われ、小野地区・大鶴地区が甚大な被害を受け、JR久大本線の花月川橋梁が流されるなど、生活や観光に大きな影響を及ぼしました。



1953（昭和28）年6月、日田地方に猛烈な大雨が降り、三隈川が氾濫して、流れを塞ぎ止めた三隈大橋から激流が市街地に流れ込み、市街の約9割の家が浸水したほか、死者行方不明19人・流出家屋571軒などの大きな被害を残しました。

将来の日田市

わたしたちの日田市は、豊かな自然やすばらしい景観、数多くの文化遺産を持っており、身近なところにも先人の築いてきた歴史や伝統文化を見たり、触れたりできます。

また、これまでも「水郷すいきょうのまち」、「天領てんりょうのまち」、「林業りんぎょうのまち」、「文教ぶんきょうのまち」とさまざまな言葉で表現されてきたことから、日田市の豊かさを証明できます。

日田市は北部九州の中央に位置しています。そのため、奈良時代から交通の要衝ようしゅうとして重要な地点とされてきました。江戸時代には幕府の直轄地ちよっかつち（「天領」）となり、日田代官所が設置され、全国各地の人や物資が集まる地域として日田は大きく発展しました。

町が発展することは、歴史や文化にも大きな影響を与えることになります。その結果、江戸時代には多くの先哲や伝統文化が日田に誕生しています。先哲せんてつには、九州を代表する俳人はいじんの中村西国なかむらさいこく、農民を代表して立ち上がった穴井六郎右衛門あないろくろうえもん、私塾咸宜園ひろせを開いた廣瀬淡窓や農学者として全国で活躍した大蔵永常おおくらながつねがいます。近代に入ると大蔵大臣おおくらを務めた井上準之助いのうえじゅんのすけなどの活躍などが知られ、すばらしい先人たちの教えを身近に学ぶことができます。

また、伝統文化には小鹿田焼おんたやきや日田祇園ぎおん、三隈川の鶉飼うかい、くにち楽がくなど現在も受け継がれているものが多く、地域の皆さんが支え合い、協力することで未来へと引き継がれていきます。そのほか、日田地域では最も古い建築のおおのおいまつてんまんしゃまめだまちや豆田町の町並みぎょうとくけ、行徳家住宅やはたけや旧矢羽田家住宅など地域の特性を物語る建物が多いため日田の特色の一

つです。

ふるさとの歴史は、自然の恵みと先人たちの努力によってつくり上げられたものです。そのことは現代に暮らすわたしたちにとっても大切な財産であります。



2005（平成17）年3月に旧日田市と日田郡は1市2町3村が合併して新しい「日田市」となり、「人と自然が共生し、やすらぎ・活気・笑顔に満ちた交流都市」を将来像に描いて出発しました。今後、どのような「まちづくり」を進めれば良いのか考えるとき、最初に必要なのは皆さんが地域を知ることから始まります。みなさんが生活する地域がこれからも元気で安心して暮らすことのできる町にするためには、自分たちの地域「ふるさと」のことを十分理解し、自然や歴史・文化を大事に守り育てていくことが必要となります。まずは、学校や友人と一緒に地域について学習し、先人から受け継いできた歴史や文化に興味をいただいてください。将来の日田市が皆さんの子どもたちやその孫の代まで自慢じまんできるような、未来に誇れるほこ日田市をつくっていきましょう。



私たちの町は「水郷ひた」と呼ばれています。この町の豊かな自然や歴史、そして文化や産業（林業）は全てこの水の恵みを受けて育まれてきました。日田市の将来もこの自然（水と緑）とともに歴史を守り育てていくことが大事です。